

▲人頭相角す 平安道人は古來牛と呼ばれた程あつて頑固な上に中々其の頭が堅く成つて居る、甲と乙と相争ふ時に室内であつたなら必ず頭と頭とを以て相撃ち相角するのである、一寸聞いた丈けでは嘘のやうだが決して嘘でない、現に僕かざる喧嘩を實見したのた一方が撃ち捲くられ街き捲くられ愈々閉口する迄決してやめぬ、夫れに大勢見物人が群集し双方の妻子が泣き乍ら止めやうとするけれど應じない、丸で闘牛の如きものだ、之では牛の稱あるも尤もだと思じた、平壤人の文句に「一度怒りて頭を振へば柱も天井も碎き割つて了ふぞ」と云ふ相だ、丁度江戸ッ兒の「メワン奴イ」流と見ゆる珍らしい氣風ではないか。

夏草や牧童牛を放ちけり 暫月
高麗の小日本の人に馴れてけり 同

(27) 朝鮮の犬

▲食用に供す 朝鮮では犬のことを狗と云ひて決して犬とは云はぬ、字で書いても通用せぬ、支那の語にも豕々として喪家之狗など云ふ語があるが夫れはくゞ貧乏らしいそして何とのふ世の末らしい瘦せ犬が朝鮮八道到る處に群を爲して居る、朝鮮では犬に格段の食物を與ふるは少なく廢物利用主義で小兒や大人の糞便を庭先きに放置すれば犬若くは豚が之を食料とするのである、そして此の犬を何うするかと云へば結局自家の食料に用ふるのである、飢饉で食物に困るか左は無くとも年内或る祭典には必ず犬を殺して其の肉を食ふのである、故に比較的犬を大切に居る。

▲社會の犬國家の犬 朝鮮でも矢張り間諜のやうな奴を狗と云つ

て排斥して居る、自家の利慾の爲めに他を賣りて邪守に訴へ或は敵に密告するやうな物は朝鮮社會に插く程ある、尙ほ進んで國際間に一方の犬となる人物は頗る多くして朝鮮人は天性此の種の技に長けて居る、彼の露探などやる奴は支那人にも珍らしくないが北韓方面は皆韓人だ、虎の威を藉る狐と主人に飼役せらるゝ犬とは朝鮮國の名産と云つてもよい。

。 。 。 。 。
 。。。。。。
 。。。。。。
 。。。。。。
 。。。。。。

。。。。。。。。
 。。。。。。。。
 。。。。。。。。
 。。。。。。。。
 。。。。。。。。

。。。。。。。。

(28) 驢馬の聲

▲亡國の聲 月夜の晩に物など案じて寝られぬ時、驢馬の鳴く聲ほど悲しきものはない、萬里遠征の空にある征夫の旅情も亦同じと見て、さる軍人が余と共に此の事を語り感興を興にしたことがある其の泣き始むるや心中の苦痛を人に訴ふるが如く中頃開高き比は家破れ國亡ぶかと疑はしむる計りである、奈何にも一心を單めた泣き方で彼の葬式に出る泣き男泣き女よりは此方が餘程悲しく聞こわる朝鮮人は愈々亡國の民と見て此の驢馬の嘶聲が非常に良い聲だと云つて居る、因みに驢馬は雞の如く時を定めて其の亡國副を發する

▲馬よりも強し 驢馬は小さいけれど中々小賢しくて人嫌ひを爲

し時に脚で跳ね齒で噛むことがある、殊に子供などゝ見たら馬鹿にしてかゝり油断のならぬ動物でうる、此奴が人を載せて道を行く時廻り道に至れば直線を取りて成る可く近道を踏み乗手が其れを知らずして反対に引けば非常に立腹する、其の結果故意に前脚を折りて乗手を轉ばすことがあるから毎に機嫌を取りつゝ用心せねばならぬ又朝鮮の馬と驢馬とを比較するに同じ荷物を附けて同じ道を行き馬の疲労して一歩も行けぬ時に驢馬の奴は平氣で居る、確かに馬よりも強い、無論相手が朝鮮馬のことだ。

秋の夜や馬鞍る驢馬の聲 野月

驢馬啼くや二十三夜の月掛ぬ 岡

(29) 鶴 と 雁 鳴

▲城上に鶴の一群 春の朝天氣麗らかなるに平壤城上鶴の一群が空高く舞ふて居るのを見た時程未だ壯麗偉大なる威を起したことはない、此の鳥が鳥類の王なるや否やは暫く別問題として兎に角其の一群は確かに萬鳥の醜群を閉止せしむる價值がある、況んや二群三群をやだ、人若し口を開かば驚くは鶴の如くあり度いものだ。

▲朝鮮鳥と雉 鶴の一群に反して千群萬群の最も醜なるものは朝鮮鳥である、日本の鳥でも随分喧しいけれども朝鮮の紋鳥は又格別だ。それから朝鮮のことを雜林と云ひ雞林八道など稱するがあれは何處から附けた名か詳しくはしらぬ、但雞林に雉が深山居るのは驚く計りだ春にもなれば到る處で鳴いて居る、雉を假りに雞と見て雞

林の名を附けたのではあるまいか。

▲**登々たる水陣** 雁が天空を翔ける時は實に整々たる行列にして其の江上に浮べる様は當に登々たる水陣の形ちである、規則正しく一列又は二列に列んでスイツ!!と水を分け行く有様、老幼とも高尙とも響へやうがない、さらば古來兵書にも雁列を引用するものだらう、日本には此の雁列を見ることが次第に稀となつたが朝鮮ではまだく盛んなものである、尤も斯國でも漢江の邊は近頃日本人の狩獵の爲めに次第に減じて以前のやうにはないけれ共北方大同江、清川江、鴨綠江へ行けば尙ほ澤山な雁である、之を撃つには尖々方法もあるが日本服を脱して朝鮮服を着ることが一の要件である、何うしても日本服は鳥が恐れて近くへ寄せない、日本人は鳥にさい恐れられるのだ。

▲**鴨の羽音** 雁と鴨とは似たやうなもので孰れも朝鮮に多い、鴨は雁よりは比較的痴鈍で幾らか撃ち易いやうだ、鴨には首首とか水鴨とか數多種類がある、或新渡航者は野にある雁と鴨との區別が分らないとて色々質問されたが鴨は雁のやうに列を作らないで其の羽音が高いから直ぐ分る、彼の平家の大軍が富士川で潰走したのは即ち此の水鴨の羽音に驚いたのだ。

▲**冬去り春來る** 日本では雁は秋來り春去るものであるが、朝鮮では秋から冬へ掛けて皆去つて了ふ、并は即ち日本などへ來るのである、其れから春日本を去る奴が朝鮮では再び戻つて來るのである故に日本では冬雁を撃つに反し朝鮮では秋と春との二回に撃つ、尤も夏は北方へ去つて了ふ。

▲**白鳥の浮遊** それから序手だから肥するが朝鮮の各江には雁、

鴨の外白鳥の列を作つて浮遊するものが少くない之は雁よりも太く雁と鶴との間位だ、真白で實に奇麗な鳥だ、尙ほ山七面鳥、鴨等も江邊に澤山居るから遊獵には實に面白い。

鶴の聖態々々種く白女漢 暫月
雁と鴨共鶴の陣を遊りけり 同

(30) 虎 と 山 猫

▲靈岩の一夜 朝鮮の虎と云へば日本で名高いものであるが現今は次第に減少して滅多に人家近くなどへ出て来ない、僕などは勿論生きた野の虎を見たことも無いけれ共僕の一友が木浦の奥の靈岩と云ふ處を旅する時實見したことがあるから其實話を傳へることとせう、友は非常の豪膽な男で又沈黙な人である、朝鮮には永く居るのだが或る歳の冬木浦の奥へ旅して夕方靈岩と云ふ地に着し僅か二三戸ある其の一へ宿泊したが夜半何事か騒がしく鐘を叩く音頻りなるにぞ賦にても來れるか出で眺めんと起き上れば家人は震ひ乍ら來り戒めて曰く虎來れり!! 虎來れり!! 止まり賜へと勤む、友は用意の一刀を執りて窓より外を覗ふ時、雌雄二頭の高は上なる家の扉を超へ

て身軽く其の宿の庭へ飛び下り四遊を窺ふ様子であつた。

▲豚二頭を奪去る。友は刀を引き寄せて若し来らば日本男児の膽を試みん覺悟なりしが彼等は友に氣付かずして徐々豚小屋の方に進み柵を排して各々一頭を獲るや身を躍らして飛鳥の如く走去らんとす、友は大喝一聲戸を排して躍り出で刀を抜いて斬付けたれ共及ばず二頭共逃走し秋水徒らに残月を浴びて物凄き光景なりしとて宿なる韓人は却て友の爲す處に驚きたりと云ふ、豚児等は最初より一聲をも發し得ず虎に睨まれては猫の前の鼠同様なりと其れは左もありそふなことだ。

▲九月山の豹。震海道の九月山と云ふは僕が行つた安岳温泉の上の山だが非常の大山で虎及豹が深山居るそうだ、恰度此山に三四居て年々人を喰ふと云ふ一支山を見たが僕は病後ではあり登つては見

なかつた、威鏡道邊で取れる豹には時々五十貫目内外のものあり數十人で擠ひ来るそうだ。

▲家雞を捕ふ。朝鮮には又山猫が深山居る、僕が兼二浦に居た時であつた、恰度家の直ぐ背後の山に居たと見わて毎夜雞の巢を荒らし遂に一羽を捕ふ數日にして又一羽を捕ふた、二三友相戒めて翌夜私かに待つて居ると先方でも警戒したものか出て来ない四五日過ぎて夜半頃僕が用場へ行かんとすれば俄かに屋根が鳴り始めた、見れば山猫の奴長き尾を垂れて逃げ廻つて居る石など打附くる内遂に山へ逃げ入つた。

▲尾を撃切る。又數日の後三度び雞を捕ふた、血氣の本多と云ふが最早承知せず牛肉を餌として庭に大なる鼠を造つたが容易に掛らない依つて獵銃を用意して待つ程に一夜猫が岩上に居るを發見し月の

明りに狙ひ定めて發射せるが尾に當りて裂けたりとて其の寸片を携
ゑ歸つた、流石の山猫先生驚いたと見わけて爾來再び出て來なかつた。

虎の熊月に千爪を響きけり 野月
恐ろしき山猫を狙ひけり 同

(31) 朝鮮の蠅其他

▲山の如き蠅 朝鮮の蠅と來たら其の夥だしいことお話にはならぬ、尤も日本人の各居留地内には驅逐法若くは撲滅法行届いて左程でも無いが一步踏み込んで韓人街に至れば何と評してよいか分らぬ程だ、彼等は一尙夫れを氣にせず食物なり食器なり千客萬來だから繁殖せずには居られない、子は孫を産み孫は數千匹に増殖して猶ほ祖父祖母と同棲と云ふ始末だから滅する譯がない、餘程運の悪い奴でなければ韓人に殺さるゝことはない、天井から壁から白い處は糞尿で其黒にし主人が糞尿の口邊から鼻の中迄卵を産み付けて其の殖民地と心得て居る、蠅たるもの宜敷日本を去りて渡韓すべしだ。

▲ピソングの群 朝鮮人は南京虫の事をピソングと云ふ、日本でも近

來船を獲ゆるやうだが朝鮮では之も戸毎に群をなして居る、若し韓人旅宿に一泊せんか夜半此の恐るべき虫が群を爲して來襲し其の音は陣風の如しと云ふ程だ、刺さるれば則ち腫れ膨れ甚だしきは痲病患者の如き形状を爲すに至る、此奴は殺虫剤で見事に倒れ、翌朝死屍を檢するに數十百匹に上ることがある、尤も日本人市街地には蠅同様僅少だ。

▲韓人と虱 恐多いことだが上はやんどなき御方より下萬民に至る迄朝鮮人にして虱と親まぬものは一人もあるまい、其れも夏の間は比較的まだよいが冬になると危険で、滅多に側に寄り付けない、彼等は又虱の居るのを少しも恥と思はぬらしく正三品何某殿にして某新聞社の編輯局裡着物を裏返してキツリキツリ取り取ると云ふ鹽梅である、何さま君子の風ありと云ふべしだ。

▲蚤及臭虫 既に蠅ありヒソクあり虱あり而して尙ほ蚤あるに至つては皮膚に悪感を催ふす計りだが其の蚤なるものも決して少くはない、日本内地などに比べては無論多い方だ、加ふるに種々の臭虫が其の特有の臭氣を放つて壁及坐上を前ひ廻るのだから朝鮮温突の生活も實に容易ではない、併し之等は今後日本人の増加と共に次第に退治されるものである、虫類に辟易して韓國移住が出來ぬやうでは總ての海外事業は駄目だ。況んや朝鮮各港には日本内地と同様な居留地のあるをだや。

夕立や埋温突を埋めけり 五月
五月蟻しと思はぬ國の五月蟻 同

(32) 韓人の怒る時

△附支那人の怒る時▽

▲妻を盗られた時 韓人の怒る時と云つたつて平素普通の喜怒哀樂のことを云ふのではない、怒ると云へば一生懸命火のやうになつて赫怒することを云ふのである、悠々閑々豚の様な韓人でも其んなに怒ることがあるかと云へば一寸不思議のやうだが、いくら韓人だて怒らぬとは限らぬ、實際火の様になつて生命懸けで怒ることがある、其れは如何なる場合かと云へば妻を盗まれた時である、勿論呑ん氣な韓人のことだから國が亡びやうが國王が殺されやうが、开んなことでもヒクともするものでない、ハ、ハ、ア君も到頭やられ玉ひしかなど笑つて居る位なものである、故に彼等に向つて義憤など求め

た處で所詮駄目である又金錢に向つて韓人は割合に執着心が少ない儲けても直ぐ使ふて了ふのが彼等の流義である、金を澤山持てば屢々危険な目に遭ふから金にも比較的淡泊である、其の他天性悠長な質だから大概のことは怒らずに済ます、氣早の日本人から見れば無神経ではあるまいかと思はれる位だ、が併し此處に一つ彼等の決して堪へ得ざることとは其の妻が姦通した時若くは強制的に盗まれた時である、此の時計りは奈何なる韓人も怒髮冠を衝き鬼の如き形相して一生懸命になる、假令相手が役人でも外國人でも中々承知しないマア韓人の眞に怒る時と云へば此の時位なものだらう。

▲利を争ふ時 韓人の怒る時は右の様な場合であるがさらば支那人の怒る時は奈何なる場合かと云ふに开は韓人と正反對で利を争ふ時である、勿論支那人でも妻を盗まれたならば开は怒るに相違無い

が支那人は殊に婦人を幽閉し糞など小くして外へ出さぬから斯かる出来事は滅多にない、支那人はさる稀な場合よりも平素吾々の目前に於て一生懸命争ふ果は火になつて怒り出すことが珍らしくない、即ち彼等が金錢を争ふ時で此場合には支那人同志若くは外國人など云ふ觀念は少しもない、平素利益保全の爲めにこそ彼等は一致して外國人に當つて居るが若し一朝利を争ふ場合になつたら同國人だの兄弟だの云ふ觀念は些少もなく全く生命懸けで争ふのだ、若し彼等の頭を一ツや二ツ撲つた處で多くの奴は平氣で居るが五錢でも拾錢でもやるべき金をやらなかつたら最後強硬なる談判は開始され執念深く要求して何時迄でも退きはしない、兎も角も支那人は金錢の爲めなら生命でも捨て兼ねまじき人間だ、朝鮮人の法を盜られる迄怒らぬのと引き比べて面白い國民的對象ではないか。

(33) 韓人待遇に就て

▲自然的待遇 我等は日本人として奈何に韓人を待遇すれば良いだらうか、勿論韓人も人だから人を人として待遇すればそれで良い筈だけれ共實際に當りて左様簡単な道理計りには行かぬ、假令基督敎の牧師や人道學者の反對を受けやうとも韓人の如き下等の人間を我等と同等に扱ふことは其心が承知せぬ、現に吾々日本人でさへ開戦前は歐米人より確かに租税輕蔑せられて居たではないか、凡そ品位のあるものが其の品位相當に禮遇せらるゝのは自然の理であらう故に文明國民は文明的に禮遇され野蠻人は野蠻的に取扱はれ猿は猿、杖に牛は牛、杖に馬は馬、杖に皆夫々相當に待遇されるのが自然である、此の自然的待遇法より割り出せば韓人は豚と人との中間位に

取扱はれて満足しなければならぬ、何故とすれば韓人は人間の如き動物で豚に近きものなればなりだ。併し乍ら奈何に自然法とは云へ既に人間たる以上は假令下等だからとてマサカ動物扱ひにはされぬ依つて茲に人類として奈何なる程度に待遇すべきかを研究せねばならぬ。

▲可成的待遇すべし 韓人として固より種々區別がある高等なるものは寧ろ日本人の或ものより優り下等なるものは實際豚同様殆ど甲乙無しである、さらば其の高等なるものは成るべく待遇するがよい日本語を解し日本の事情を知れるものは日本的に交際し其の然らざるものも品位、智識に對しては充分の敬意を表してやるがよい、斯くて韓人が悉く進化して高等のものゝみとなれば日韓人の交際は圓滿に結ばれる譯だが奈何せん實際に於て高等人は少なく彼の兩班と

稱するものも多くは無智無能濟度すべからざる徒のみだ、斯かる輩に對して對等的社交を結ぶは到底不可能だ、已むを得ず彼等を抑制せねばならぬ、殊に我が政府の在韓諸官衙が韓人取扱に關する乎心は餘程利害を考へて費度い。

▲日本人抑制主義 然るに我が在韓諸官衙では何う云ふものか韓人優遇の方針を執つて同胞國民を抑制しやうとする傾向がある、何か或る事件で日韓人の紛争となれば多くの場合に勝を制するのは韓人で敗を執らされるのは日本人だ、勿論個人間に纏まりが附かずして官衙へ持出す程の事件だから日韓人共双方に理窟のあるのは當然の話だ、其處で日本人の主張は大概に聞き取つて相手の韓人の主張は特に通辯を入れ若くは韓語の分る日本官吏が直接に聞取る、其の結果は多く韓人の方が優待される傾向がありはしないかと思はれる、

兎に角韓人は我が官衙へ出入するのを少しも恐れぬ、自國の官衙と聞けば大抵戰慄する位だが日本の官衙と来れば優遇される。少くも自國官衙の様に虐待されぬもの。と信じて居る、之は韓人懐柔策として誠は結構であらう、乍併爲めに韓人をして日本の官民與みし易しと思はしむるに至つては其の利害孰れであらうか由來世界に韓人程忍に犯れて増長し易き國民は無いのである。

▲率る通辯を廢すべし。由來韓國で諸官民に歴はるゝ通辯なるものを見るに多くは幼少より韓國で生長し其の頭腦が朝鮮式に固まつて居るものゝみだ、之等が方今の新時勢を解せぬのは無論のことだが其の餘りに韓國及韓國人を曲解するには驚き入る。假へば此處に某隊に於て通辯に擧げられたるものありとせんに彼は上官より命を受けて其れを有りの儘に韓人に通話すれば其れで良い、若し足りぬ

ば多少の説明を加ふれば分る筈だ其れを通辯とも云はるゝものは朝鮮のことに就き博學多識で無ければならぬかのやう誤解し事毎に理窟を附けて朝鮮の人情風俗を楯に執り我が無經驗の上官達へ何でも教授するやうな氣で居る、故に命令の傳達に種々の故障を生じ敏活の行動を欠くやうな場合が少なくない、若し何か日韓人間に紛争でも起れば韓人の側に程のよい理窟を附けるのは大抵此の手合ひだ、左無きだに韓人は辭令に長けて居るから之を尤もらしく通譯すれば韓人の事は悉く正義らしく聞える、通辯先生は斯くせねば自家の地位が保てぬかの様考ゑ又中には斯くして韓人より賄賂を食るものもある、日本でも一時外國語の通辯に種々の情弊ありしを鑑みれば思ひ半ばに過ぐべしだ。斯かる通辯は率る廢止して必要なことは命令的にやるがよい。其の内には韓人の方から皆日本語を覺わて来る、

朝鮮は正に日本語範圍で韓人位階學に長けた國民は無いではないか
 ▲せしむべし 一體在韓諸官衙が自から韓人を優遇せんとか懐柔
 せんとかするのは甚だ狭少な話である、宜敷方針を示して在韓數十
 萬の國民に之をせしむればよいのだ、國民は其の方針と自家の所信
 とによりて適當に韓人を待遇すればよいのだ、而して諸官衙は我國
 民の爲す處を保護監督すればよいではないか、何でもする可し主義
 を廢して一切萬事せしむべし主義で大きくやつて貰ひ度いものだ。

人を待つ禮儀を豚に教わけり 暫月
 豚鳴くや豚小豚臭き秋の暮 國

(34) 軍艦揚武物語

▲朝鮮にも軍艦 がある、并は揚武と附つて素とは三井物産會社
 の石炭運送船であつた老朽船を少々改造してちよいと武裝した迄の
 ものだ、其れでも五拾萬圓出して居る、一體全體斯かる滑稽的軍艦
 を買ふに至つた原因は去る三十六年恰かも大韓國大皇帝陛下が登極
 四十年稱慶禮式を舉行せんとて恐ろしい馬鹿騒ぎを始め、世界列國
 から大使を招待する筈で何でも世界的でなくてはならぬと無暗にの
 ぼせ上げ、東京から馬車を買込むとか上等椅子を仕入れるとか、一
 切萬事ハイカラ的にしてお負けに世界各國の軍艦が仁川で脱砲を放
 つ時答禮せなくては一國の體面に關はるなどの迷論が現はれて遂に
 月尾島に砲臺を築き軍艦揚武を買入れるやうな事になつたのだ、

されば揚武は全く自國警備の必要に非ずして。

▲答禮用の盧師艦　として購入せられたものだから始めより滑稽的性質を帯びて居る何でも其の頃は滑稽が大流行で月尾島の砲臺なども造つた儘未だ國際上の通牒も済まざる内に獨逸の軍艦が仁川へ入港して祝砲を打つたものだから指揮官先生之は早速答禮と心得て突然禮砲を發射した、兎に角馬鹿太い大砲を月尾島で撃つものだから仁川居留民も驚いたが其れよりも驚いたのは獨逸軍艦で早速京城の獨逸公使へ通知すると公使よりは外部へ照會して國際法を無視せる其の發砲を咎めた、スルと外部や軍部の先生始めて其れと心付き大變に謝罪して漸く事が済んだと云ふが随分馬鹿氣な話サ。

▲實彈發射演習　頗る滑稽的に仕組まれた四十年稱慶禮式も遂に煙の様に延引せられ折角買込んだ軍艦揚武も一向答禮の要が無くな

つた、其處へ行くと根が惚れ易い厭き易い韓人のことだから俄かに軍艦不必要論などが持上がり契約者たる三井物産會社と韓廷との間に兎角の紛議が絶えず四月に仁川へ着いた軍艦を五月六月に至りて未だ受授の手續さへ済まないと云ふ始末だ、處で林公使が其の間を調停され兎に角代金は數回に割つて仕拂ふこととし軍艦丈けは韓廷へ受取ることと相談がついた。其處で韓廷よりは軍部協辦の崔某と云ふもの外四五名が委員となつて仁川へ下り三井物産よりは小田垣支配人を始め出張し余も朝鮮新報記者として招かれて艦に至り双方立合の上受授を行ふこととした、然るに崔協辦は是非共實彈發射演習をやつて呉れよ其れで無くては受取らぬと主張する、と云ふのは豫て軍艦買入に反對した露公使などが揚武は仕方無いボロ船で實彈一個發射すれば自己の震動で船が破損するなど言ひ觸らしたもの

だから軍部大臣が實彈發射演習の命令を發したものでらしい。

▲八尾島外に出づ 三井の方でも仕方なしに承知した、實際艦は

商船だから艦首及艦尾の十二吋砲などを發射する時は多少の破損が無いとも限らぬ、其れを承知の上愈々實彈射撃を試むることに決し揚武は鎗を捲いて徐々進行した、其の間に余は普ねく艦内を巡視したが裝飾丈けは流石によく出来て居る殊に韓國唯一の軍艦だから玉座の設備迄造られて窓の前には大韓國旗が交叉され窓の内には美事なる椅子や銀の燭臺などが陳列されてある。朝鮮人が之を見て悦ぶのも無理はない。斯くて船は次第に進航し彼の日露戦争の序幕を開きたる八尾島の砲戦地を過ぎて島外に迄出航した。此の邊こそ替からぬとて汽力を緩めスローにして射撃の用意に取掛つた。

▲韓人の滑稽劇 其の當時は秘密であつたが揚武には日本より回

航の際我が參謀の某佐官が唯だ監督と云ふ名稱の下に平服を着て乗り込んで居られた、其の他乗組の各員は皆悉く休職又は豫後備の我が海軍將士である、余等が艦橋に在りて眺むる時に此等の諸氏は機敏に立働いて射撃に取り掛り先づ舷側の速射砲四門を各門五發づゝ發射した、軍部協辦以下韓人の諸先生先づ其の舟に喫驚し亞で實彈の遠く海中に落ちて水を蹴る状を見るや手を拍つて驚嘆し揚武の武力天下無比と叫んだであらう。亞で今度は艦首及艦尾の十二吋砲發射に取掛つたが韓人先生多くは震ふて寄り付かない、其の大なる彈道は弓状をなして遙かに水柱を立て再び外れて濺波を蹴る處番等と雖も拍手せずには居られない。幸にして射撃の爲めに艦は何等の支障も無かつたからサア韓人先生悦ぶの悦ばないの天へでも登るやうに躍り出した、處で監督將校はお前等も明日から揚武の士官になる

のだからナト發砲して見よと擲擧せられたが韓人も流石に免れやうなく遂に其の速射砲を試發することゝなつた、誰彼と譲り合つた上選出せられた大勇者が砲に向つたが母は當に一間も後方に退き幾ふ手先に力を凝め一生懸命發砲せんとする時に他の諸韓人が半ば其れを危ぶみ半ば物珍らし氣に眺むる様は既に何とも云へぬ滑稽劇なるを、愈々ズドンと發砲して一同アツと腰を抜かした時には眞に吹き出さずには居られなかつた、其れでも兎に角無事に演習が済み試運轉が済んで歸航する際は恰度正午でもあり旁々ケビンに於て祝杯を擧げられたが韓人先生大得意で留滯の如きは巧みなる日本語もて「朝鮮にも之で軍艦が出来ました私は今日の結果を軍部大臣に報告し今後大に海軍擴張の方案を立てる積りです」と眞面目に語るに至つては聊か噴飯の材料たるべきものだ。

▲艦長副長及水兵

軍艦揚武には既に艦長副長の任命があつた、开は二週前程前の韓廷の官報に載せられてあつたが實物は何んなものかと云へば艦長が年齢二十四五で三年程我國に遊學し大阪商船學校を卒業して四等運轉師の免狀を貰つた計りの男だ、よく日本語に通じ余は暫く會話したけれ共名前は今忘れて了つた、副艦長は金書房と云ひ髭の多い男で之は多少船乗りの心得あり今は仁川の花開洞で女郎屋(韓女)の亭主をやつて居る男が一躍軍艦の副艦長殿だ、滑稽も此に至つて極れりではないか、其れから乗組の水兵と云ふのは皆京城の各官吏の家に徒食して居る乞食のみだ。朝鮮の官吏と云へば皆此の乞食を養はねばならぬので官吏も内々困つて居るから會々新造軍艦見物にとて乞食を連れて仁川へ下り軍艦へ来て乞食は其の僅水兵にするとか或は一時遣れの飽辨を用ひて軍艦へ遣して了ふ、

それがゴロ／＼集まつて軍艦に充ちて居る、お貸けに其の官吏先生は皆泥棒で。

▲軍艦の器物を盗んで歸つて行く現に玉座の中にあつた銀の皿や洋食用のナイフ等は殆んど皆此等の見物官吏が持つて歸つて了つたそうだ、自國の厄介乞食をば軍艦に遣し大切な器物は乎ん手に持つて行くとは随分呆れた韓吏ではないか。其んな奴は艦長の権力でトシ／＼處分すればよいではないかと艦長に云へば未だ何等の権限をも與へられて居らぬから先方の官位に對し左様は出来ぬと答ふ。

イヤ早や……………。

▲艦長以下の給料と食物 三井の方では既に引渡も済んだから今日からは食物も皆先方持で賄方も引き上げると云つたら艦内は俄かに大恐慌を惹起した、井は忽ち晩に食ふべき米も無ければ業に用ふ

べき鹽もないといふのだ、艦長と軍部協辦とが速りに相談して居たが遂に艦長と副長とが各自の懐中より何程か宛つを出し合つて兎も角も米と鹽とを互ひに使を出した、其れで君等の給料は？と聞けば任命以來未だ一厘の金も此の艦へ渡して貰はぬと答ふ、韓廷は一切合切三井を恃みとして居たと見ゆる、惻れ果敢ない次第ではないか

▲日露戦争と揚武 其の後揚武の白い姿は常に月尾島外に見えて居たが多くは石炭が無くて動けぬと云ふ風評のみであつた、時に二度沿岸を航海したこと、後一度日本へ修繕に出掛けたことがある處が日露戦争以來全く揚武の影が見なくなつた、沈没でもしたのかと怪んで居たら近頃又ノ／＼と影を現はして來た、何でも戦争中日本の御用を勤めて居たのらしい、近頃林公使から揚武は歸港したが該艦は此處當分三井物産會社へ貸與しては奈何と照會せられし

に對して、韓廷は是非受取るに付早速引渡され度しと返答して居る。韓廷は何處迄も海軍擴張をやる氣かも知れぬ。

。 。 。 。 。
第一陣二陣は列を換はしけり 暫 月
驚いて水に飛び立つ鴨千羽 四

(35) 火 賊 遭 難 談

左の一篇は知友『金鳥生』が忠清道旅行中出会せし遭難談なるが面白ければ請ふて茲に収録することとせり

▲鐵道線路や守備隊に近い處はそんなこともあるまいが近來朝鮮内地には火賊の出沒甚だしく良民は皆戦々兢兢、何うしたら安穩に住はれることかと嘆息ばかり洩らして居る、處で僕（金鳥生を指す以下同じ）は従來幾度か朝鮮内地旅行をしたけれ共韓人の泥棒など眼中に描いて居す偶々韓人共が注意して呉れどもナリに高が火賊の二三十人位刀一本あれば大丈夫と壯言し又實際一度位は會つて見度いと思つて居たのであつたが今度忠清道旅行中圖らずも火賊の御見舞を受けて彼等がドンなものであるかと云ふことも分つたから内地旅

行者の爲め其の模様を御話するとしやう。

▲四月の下旬 僕は一友と共に禮山郡から徳山郡に赴いた、其の前にも僕の友は洪洲から禮山への途で火賊の襲撃を受け一喝して退ひ散らしたこともあるのだから多少の用心丈けはして儘くがよからうと僕は鳥銃、短刀、友は太刀、短銃を携わした。

▲丘陵の一軒屋 九萬浦の渡船を渡つて徳山の斗山に着し唯ある酒幕に投宿した此處が事の起つた場所だから少し地勢を説明して置かう、此邊は牙山平野の窮まる處で廣田漢々として一瞬際限なく横に涉つた九萬浦も米穀を一日に九萬石も積出すから起つた地名だそうだ。處で僕等の酒幕は路が小さなダラ／＼坂を登らうとする其の横手に方つて小丘を後ろにし往來に向へる一軒屋であつた、其の小丘は丁字形に更に他の丘陵に續いて其處迄行けば一寸した村もある

けれ其他の三方は一溜瀾如たる平野が開けて居るのだ。

▲就眠前の準備 來がけに獲た鴨肉に舌破を打ち數杯の濁酒に陶然として僕等は温突に脚踏み伸ばした、眠る前に作の韓人申書房が虫でも知らしたと云ふものであらうか此處は一軒屋だから泥棒が道入るかも知れぬ用心せねばならぬとてステッキを窓の環に通して壁と壁とに涉し一寸引いても明かぬようにした、併し僕はナーに恟々するには及ばぬ吾輩が居るんだなと云ひ乍らも平素に無く用心して獵銃は半ば起きて手を伸ばせば届く様に裝弾した壁壁に掛け自分の右手には短刀と打違々にピストルを置き、其の左手即ち窓の正面には友の小君が刀を右脇に引付けて横はり左側の方には申書房が眠つて居た。

▲夢中の襲撃 眠つて未だ間もないこと僕等の夢は唯ならぬ物替

に壊破された、半ば現つに眼を開けばほの暗き窓の外には數十名の呼ぶ聲が手に取る如く何時か窓に手をかけてガタ／＼と揺ぶる音が今にも窓を破りそうである僕は殆んど無意識に半ば起き上がつて銃を捜したけれ共置いた處にはない、其中に叫聲と戸の揺れる音とは益々烈しい、願れば小君も申書房も起きて居るらしいので「鐵砲が無いぞ」と言へば小君は己の刀が無いと言ふ。其の瞬間に僕は考へた、僕等は元來此村へ石油の賣懸代金を取りに來たのだから其者が村の無頼漢を驅り集めそして宿の亭主が親類だから豫め僕等の眠つて居る間に武器を持去つたのではあるまいかと、兎角する内に僕は漸くピストルと短刀とを捜し小君も亦刀を執つた。

▲ピストルの亂射 窓外に居る奴等も吾々の騒ぐ聲を聞き付けて窓に向けて頻りに拳銃を發射する、暗を劈く轟然たる響き、激々と

映する火光、其の間には丸太を持つて來て窓の格子を衝き破る音が物凄しい計りである、其の間には刀で切れ／＼と云ふ聲もする、其處で僕は又考へた、村の奴等の喧嘩買にしては餘りに大袈裟過ぎる、之はテツキリ火賊の光來に相違ない、其れなら當方にも覺悟があるよ僕は斜めに窓に向き直り短刀持つ片手に今にも崩れそうな窓を押しつゝ片手を舉げて二回迄拳銃を發射した、若し力を籠めて一押し押せば窓は造作なく壊れるであらうが先方も内を恐れて容易には近づかない、唯松の丸太を以て頻りに窓を突き破らうとして居る。

▲裏窓からも賊 兎角する内に裏手に方つて又メリ／＼バリ／＼と烈しい音が始まつた振り返つて凝視すれば裏手の壁に一尺計りの小窓があるのがほの白く見える、其れを何者か頻りにバリ／＼破つて居るのだ之を見て僕は大に驚き腹背同時に敵を受けては叶はぬと

思つたが併し幸にもそれは泥棒ではなくて申書房が裏窓を破つて這出するのであつた、此時早や淡の窓は全く破れて頼みとならぬから僕等は此處で這入つて来る奴を片つ端から刺し殺そうと云ふことに肝を極めて居た。

▲**佃・匂・して・出・づ** 外の奴等も吾等の手に武器あることを知つてゐるから容易に侵入しては来ない、乍併拳銃や叫聲は愈々烈しく今にも潮の如く這入つて来そうに思はれるので既に申書房に依つて逃路を教わられたる僕等は一旦裏窓から這れることに定め僕が先づ窓を潜つた、元來厚い壁に狭い穴が明り取り取りに造つてあるのだから中々出悪いのを漸くのことと這ひ出した、續いて小君も亦這れ出たのである。

▲**松・林・に・潜・む** 先づ窓を佃ひ出でた僕は軒と並行したやうになつ

て居る小丘の崖に踞して友小君の出で来るを待ち傾斜面を這ふやうにして小松の林中へ身を隠した、双肌押脱いで心靜かに着物の袖を腰の邊りに捲き付け尻縫げして身輕に裝ふた、四邊を眺むれば月は綿の如き雲に蔽はれて宵の程から降り出した雨は澗々として糸の様に瀉いで居る、草も木もしどろに濡れて冷やかなる夜の氣は汗ばみたる肌に触れて心地賊に消々しい、吾等は暫し恍惚として平靜なる春の夜の夢裡に逍遙ふ心地がした。

▲**月・黒・雁・飛・高** 然れ共夢ではない我等は僅か數分前に銃聲劍光の修羅場を這れ出たのである願れば僕の右手には短刀左手には拳銃がほの白き夜色に閃き小君の手裡には尺餘の秋水龍の如く躍つて居る「是非荷物を取返さねばならぬ」期せずして此語は兩人の口より發せられた、其處で僕等は敵の動靜を探るべく幾回か松林と酒蔀の間

を這ひ乍ら往來した、其の中に俟々たる一道の火光揚れるは彼等が最早引き上げるのだ併し敵は多勢吾等は二人真正面に向つてはとても叶はぬ、用ふる處は詭計にあるのみ、依て吾等は彼等が引上ぐる方面へ潜行し僕は細徑の横なる小松蔭に蜘蛛の如く潜み隠れた、小君も少し下つて足場よき處に潜んだ、時に雲密にして月照く一陣の雁飛んで高く去つた。

▲やつ付けろ 向ふから來る話聲に「來たぞ」と吾々の用意する程もなく人影は次第に近づいて來る。蕙の火が火繩か、闇に閃くもの三ツ四ツ五ツ「火賊だ」兩人は叫き合つた、眞先に立つもの五六人間隔は漸く縮まり四間三間二間となつた、心臓は躍り足には滿身の力を籠むる途端、「背後に回つたぞ」と小君は叫んだ、振返り見れば我等の左手に當り七八間先なる小山の上をば半ば雜草に身を没し

つゝ背後に廻る人影がある、けれど此場合最早分秒の躊躇を許さぬ腹背同時に來らば來れ正面の敵は咫尺に迫つて居る、「やつ付けろ」の聲は同時に兩個の口を銜いて出で僕は大喝一聲「此奴」と叫んで彼等の側面へ躍り出た、同時に指は拳銃の弾機に觸れ、闇を劈く音轟然、小君の劍光は紫電の如く彼等の面前に閃めいた。

▲大に弱賊を破る 其時僕は疾風の如く左側に在る一人に迫り七首を振つて其左肩背部と覺しき處を二回逆刺した、小君も亦其の横に居た一人の左肩に一太刀浴せたらしい、之に恐れて彼等は體を轉じて逃げ出した、僕は其の跡を追ふたが此時僕の左方から刀か何か眞向に振り劈して來る奴がある、其の距離まだ三間位あるけれ共先づ拳銃の一發を御見舞申した、多分命中しなかつたらう此奴も逃げ出した、我等が烈敷追迫つて小山の裾の稍々足場よき草野に到る

や彼等は一齊に向き直つた、此處でも大分久しく戦つたが彼奴等は遂に支那兼ねて又々逃げ出し山の秘から其の下の街道迄約二間の崖を一息に飛下り道の向ひの姿島に走せ入つたのだ。

▲姿島の暗闘 我等は息も繼かず彼奴等の跡を追ひ又もや姿島にて追ひ及んだ、此處で彼等も踏み止まり愈々最後の格闘が始まつた僕は此時の有様を遥想すると水滸傳中の赤松林、瓦罐寺の條を思ひ出さずには居られない、實に此段の格闘は好箇稗史中のものであつた、時に陰月密雲の間より光を落し犬吠幽かに遠村の裡より到る、翠松疎生せる小丘を背状とし前に廣々とした水田を控ゆる處、露の玉滋き青姿を踏みしだきつゝ吾等は入り亂れて相戦つた、唯見る一個總角の大漢子突如として僕の前に現はれた、夜目に睨とは分ね共魯智深の驛杖とも見紛ふ黒棒を振り上げ僕の頭上を見がけて打下る

して來た、之が眞の魯智深であつたならば僕の首は其の儘胴の中に打込まれ僕は石龜屋次團太とでも改名する處だが中々左様は行かぬ又行つては溜らぬ此の時早く彼時遅く僕の左手は彼大漢子の胸の邊りを狙つた、轟然たる一聲、僕の拳銃は發射せられたのである。アツと一聲大漢子は棒を振冠つた儘物の美事に仰向きに仆れた、けれども共死んでは居ない、直線剣起るを隙かさず飛び込んで肩のあたりを一刀刺した、併し彼奴も中々強の者其の傷手に屈せず振り切つて逃げ出した、そいつを小君は背後から又一刀浴せた、僕は彼奴が落ちて置いた棒を拾ひ上げて見れば其れは眞に民家で見なかつた僕の獵銃であつた、此の時の嬉しさ……「獵砲を取返したぞ」と思はず叫んだ、武器を奪はれたと云ふ汚辱を翫ぎ得たからである。

▲單干遠遁逃 總角の大漢子と殆んど相前後して小君の相手も逃

げ出した、此の兩賊は最も手強く抵抗したのであつたが頭領既に北
 ぐると見るや他の奴等は吾先きにと逃げ出した斯ふなると彼我の勢
 は非常の懸隔で我等は大群を發して追う彼奴等は膽を潰おして三方
 へ分れた、何分我等は群を以て衆に對し非常に疲れて居るから一生
 懸命北ぐる彼等とは次第に遠ざかり見る／＼其の間が十間も隔つた
 『鐵砲に彈丸は無いか』小君が注意したので漸く氣付き取返した鐵
 銃を檢すれば彈は以前の儘込まつて居る、畦畔に片膝突いて打放し
 た十二番の銃は静寂なる夜陰に響いて物凄く音がした、命中したか
 何うか知らぬが之で彼奴等は愈々魂を天外に飛ばし足に任せて馳せ
 たので我等は此の上追ふ必要もなしと心静かに引き上げた、時に月
 光清く照らして春の夜は眠れる如く何時に腥風血雨の活劇があつた
 かと物言ひ度氣な顔である。

▲戦後の光景　それから宿に引返して見たが宿の女房は慄々乍ら
 我等を迎へた、意は世々に破られて室内には色々のものが引き散ら
 され足踏み入るゝ處もなき程哀れな光景であつた、我等は松火を把
 つて再び糞の場處に引返し取落した品物はないかと探したれば毛布
 とか衣類とか世ばつたものは皆捨擲した場處へ發して居たが金銭、
 時計の如きは悉く持ち去られたものだ。

▲申書房歸る　吾々が品物を探して居る處へ伴の申書房は泣き乍
 らヒュックリ歸つて來た、見れば春の夜寒に素裸體で泥やら血やら
 に塗れて居る、話を聞けば夢我夢中で逃げた爲め棘に刺されたり水
 田に落込んだり酷い目に遭つたとの事、糞に僕の鐵砲が置いた場處
 に無かつたも道理火賊襲來の時先生は一番先に目を覺まし鐵砲を取
 つて撃たうとしたけれ共雜鐵を引上げずに無暗に引金計り引張つた

ものだから一向撃てそうなことがない、ユリヤ彈丸が無いのだと其の儘放り出して逃げた相な。

▲翌日徳山那術 に遭難の顛末を報じ火賊逮捕の事を頼んだけれ共其の處置の緩慢なる、巡檢の無能なる到底お話にならず、無論何等の要領も得なかつた、其夜は徳山に一泊し翌日遭難の村に行つた處が昨晚火賊の黨類數十名襲來し此村の奴等は日本の兵隊を頼んでユナフの仲間を死ぬ目に會はしたから不都合だ、今夜復讐に來たら日本人を出せなど難題を旨ひなげ亂暴を働いた上金を三百圓奪つて行た相だ。

▲其後五十名許の火賊 が又々此村へ襲來し先日々本人に傷けられた仲間の一人は到頭死んでもう一人も六かしい之も此村の奴が日本人などを泊めるからだど村民を皆縛り上げ尻を叩くやら大變な亂

暴をして引上げたそうだ、期く大ピツに火賊を横行させて取締がつかぬとは情けない話ぢやないか……………。(完)

横濱や宇柱の如く賑つる、
由賣りや子は賑盛の人となり

(36) 歸朝の記

▲第一信 (九月十八日永登浦にて)

▲李容弼去りて上海に逃れ、玄喚運捕はれて我が軍司令部に在り、而して米費ルーズベルト氏令嬢は北京より來りて漢城政界を賑はさんとする時、余は勿皇行李を收めて歸朝するの必要に迫りぬ。顧みれば恰かも一年有半の昔、余が秃筆を載せて再び韓國に向ふの日、遙かに長白山を指して入韓の肥を草し意氣頗る揚々たるものありき。今や半歳病餘の身を以て悄悄歸路の客となる。余は人事の變遷渺の如きを思ひ、夫の小村全權が昨今の心事を揣摩して不覺悵然たざざるを得ず。國民が熱誠溢るゝ計りの萬歳聲裡に送られて横濱を出帆したる全權は、今日果して何の顔あつて帝都に土を踏まんとするか。

國民の等しく見んと欲する處なるべし。

▲仁川を出發せしは十八日の午後四時なりき、此日仁川出帆の汽船一二あり、余が新聞記者たるの故を以て優待せんことを懇願す。然れ共過般安東丸の遭難事件あり、韓海は近頃頗る危険にして時々衝突擱座等の事あるを以て遂に陸路釜山に出づることに決しぬ。然るに京釜鐵道も亦近來の大風雨にて階川氾濫し、鐵橋の流失するもの二三一々降りて渡船せざる可らず。爲めに平素十數時間にて到着する里程に二日を要す。不便言ふ計り無し、余は京釜鐵道會社より特に寄附せる優待券にて一等室に乗車すれば他に同乗者を見ず。此日夕方永登浦驛に着し、下車して旅館に一宿す。韓國の夜風早や肌寒き心地するを覺ゆ。

▲永登浦驛は京仁線と京釜線とが丁字形に相合する衝點に在り。漢

江に沿ひたる平原に臨みて汽車の外に水運の便あり、驛には機關倉庫、工場、煉瓦製造場等ありて重要の停車場たるを失はず、此地京釜線の起工當時最も殷盛を極め人口二千に餘りたるが近來其の繁榮を龍山に奪はれて龍山の人は俄かに壹千名を越ゆるに反し永登浦は次第に減少して現今七百名に過ぎずと云ふされど尙ほ旅館、料理屋、飲食店、雜貨商ありて相應の市街を爲し居れり。將來に於て水運の便を利用せば日本人が新發展地として多少の望を屬するに足るべし。

源は清く澄めどし流れ行く

まに／＼濁る漢の江の水

▲第二倍 ▲十九日夜大田驛にて

▲翌十九日早起仕度して午前七時永登浦發一番列車に乗車して釜山に向ふ。驛にて賣子が販賣する朝鮮新報一枚を購ひて一等室に乗れば先客として韓人の夫婦一組座せるあり。今朝早く漢城にて乗車せるならんと思はる。余が椅子に凭りて靜かに新報を閲讀すれば韓人先生頻りに首を伸ばして覗き込み雜報の標題を睨て喃々音讀す。余は其の多少文字あるを知りて暫く新報を置き手帳を取出して筆談を試み先づ其の姓名を問ふ、曰く前進士陳東朔、水原の人なりと、亞で水原の風景を問へば京釜道は韓國の第一而して水原は京釜道の第一なりと答ふ。筆端進んで日韓兩國人の交際に及ぶや彼憤慨して曰く。

韓國人近來風俗紊亂不顧體統錢多少則思之吾雖不敏不思錢多少

堅守兩班體禮耳。

奈何にも彼は兩班の體禮を守り韓人としては頗る高尙の人物なりと見受らる。然れ共其の水原に下車する時無断にて余の新聞紙を持ち去れるが如き果して貴族の體面を守れるもの歟。

▲陳東翔の妻は車中にも白布を被むりて顔を包み、始終隠れたる積りにて居たらんが其の癖時々布を開きて他を瞥見し自からは見られずして唯だ人をもみ見んと勉むるものゝ如し、之れ韓國婦人の常態にして普通民家の妻女と雖も他人殊に外國人の來る時は争ふて温突内に逃げ隠れ、而して室内の隙間より必ず覗き見ざれば已まざるなり凡そ一國の文野は多くの場合に於て婦人の舉動に卜するを得べし。されば斯の如き韓國婦人の手に養育せらるゝ韓人に奈何でか有爲高尙の人物を産すべき。宜なり何れも此れも瓜や茄子の類にして

小盜竊賊に巧みなるを猶ほ韓國婦人が隙間見の巧みなるが如きとなるをや嗚呼國家興亡の原因は遂に婦人の責任たるを免かれ能はざる也。▲水原驛にて陳東翔に別れ、それよりは一等室内例に依つて余一人也、新聞は彼に持去られ頗る疲勞を感ずる儘輓の中より古き冊子など引き出して見る内に纏がて正午となりぬ。給仕は一二等室内を廻りて晝食の注文を執り余が命に依つて早くも洋食は持ち運ばれぬ。憲に據りて板を横にして食卓を假設し手輕き洋食は其の上に陳列されたり。調理美ならずと雖も亦味ふに足る。且價も頗る廉なれば驛にて不味き酢、辨當を買ふの要無くして車中何れも大満足なりき。▲午後二時新灘津と稱する一驛に着す、此の驛の傍には夫の三南の沃野を流るゝ錦江の巨流ありて過口の大雨雨に橋梁の押流されたる處なり。下車して渡船せざる可らず乗客及貨物多くして一河を渡る

に二時間を費す。彼岸に着して彼方より來れる新列車に乗り換へ益山に向ふ。然るに余は此の時より悪寒を覺け、午後三時大田驛に着せし比は非常の戦慄を催ふしぬ。余が宿痾マツリアの再發なり、下車して旅館に入り病褥に臥しぬ。

初雁の血に嗜く寒を高麗人は

白衣の襟に嗜しと瀧くらむ

▲第三倍

△三十日朝大田驛にて△

▲左無きだに秋は物憂きものなるを、況してや旅の空にありて病床に悩むの苦は奈何あるべき。道般の消息到底親の厩嚙りや乃至箱入娘などの夢想たも及ぶべきに非じ。性來我慢に強き吾も暫時は全く夢中にて四十一度の高熱に呻吟の聲幽かに耳底に存するを覺わぬ。

此春以來感冒及佝麻質斯に悩むこと四ヶ月、漸く癒めれば忽ち又マツリアに犯され、荏苒遂に今日に至る、而も仁川滞在中に大に瘵染を加わたるが歸朝の途次再び此の苦痛に胃さるゝとはよくく盡きの病縁と云ふべき歟。

▲發熱數時間、次第に熱去りて夕方漸く輕快を覺わぬ、旅館の名を問へば曰く朝日館、余は當初館名をも知らずして投宿したるなり、靜かに見廻せば斯は奈何に、厩根は藪葺きの茅屋にして柱は松の丸太を用ひ、桁も同様丸太にて要所々々を繩もて括り付けたるに過ぎず、天井と云ふものなければ其の藪細工は上にゾツ下りて見苦しき名狀す可らず。余は未だ斯の如く御粗末なる旅館を見たること非ざるなり、幸に晴天なりければ危険を免れたるものゝ過日風雨の節などは各室共雨漏り疊を上げたりと云ふ、家屋既に斯の如く加ふるに

料理の不味き事夥しく露駄の革然たる牛肉などを陳列して客の前に差出す、而して一宿料金貳圓を食るに至つては不廉も亦極れりといふべし。

▲仲居兼賣春婦らしきもの二三あり、客を見立て、席に侍べり附を爲し酒を助け或は流行節を唄ひて機嫌を取る、若し祝儀を投せざる客又は相手にならぬ客を見れば頗る不待遇不親切にして手を拍つも碌々返事せず、其の粗慢なる態度其野卑なる舉動直ちに嘔吐を催すべし、斯の如きものにして猶且つ珍重され愛用さるゝ社會は眞に禍ひなるかな。

▲翌二十日、早起して仕度をなし且つ午後の發熱を呉れて豫め服薬し朝の發車を待ちたるが未だ時間あるを以て此の間に大田驛の見物を試みんとて宿を出でぬ、停車場より西に十字の街路あり新家屋崩

々建築中なり居住民三百餘にして次第に増加しつゝありと云ふ、此地京釜鐵道の中央驛にして機關倉庫の設備あり、重要の驛に數へらるゝといふ。

秋の夜を明けよと計り高麗人は

月に對してアラ、ソンの歌

▲第四信 (二十日夜釜山にて)

▲天高くして韓山に馬肥わんとす、此の日天氣晴朗にして金風徐ろに秋陽を吹き、窓下温暖にして汽車の旅行最も愉快なり、見渡せば雞林の平野稻實り高粱熟し粟、大豆亦成熟して秋の收穫を俟んとするものゝ如し、悠々、揚々、野に迫らざる白衣漢や、三々、五々、犬豚と戯るゝ韓童や、何ぞ夫れ大平の象にして又亡國の兆なるかよ

詩人墨客にして之を寫さざるは未だ善隣の道に於て一大遺憾と云ふ可き也。

▲大田驛より走ること數時間、赤登津と云ふ驛に至つて下車し再び錦江の上流を渡船せざる可らず、此河に架せる鐵橋は最早一二日にして成効すべき處を過般の暴風雨に押流され橋臺悉く破壊して大がートすら河中に墜落せるものあり、慘狀見る可らず、京釜鐵道は全線に於て數十萬圓の損害を招きたりと云ふ、暴風雨の被害亦甚だ不廉ならずとせんや

▲渡河に要すること約二時間深川驛より乗車して南に走る、永洞、彌嶺を過ぐれば秋風嶺也。此處は朝鮮山脈が北より南に長く走つて慶尙、全羅兩道の界を爲せる麓に在り、昔、加藤清正が征韓の役に通過したる跡にして今にも日本人の子孫絶わすといふ、嗚呼秋風嶺

川その名の何ぞ麗はしきよ、峰高く川滑く、秋光最も明媚にして、海外遊子の俗腸を洗ふに足る。

▲秋風嶺より二三の墜道を抜けて汽車は東に又南に走り大邱に着せしは夕暮時、其れより慶山、清道を経て密陽に至れば此處も亦鐵橋の陥落せる第三の遭難所なるが幸にも早や假橋を架して下車渡船の厄を免れたり、三湍津にて馬山浦枝線と相合す、院洞、勿燕を経て釜山の草梁驛に着せしは二十日午後九時三十分なりき。

から關の野に狂ひたる虎さへも

君が驍騎に影滑むなり

▲第五信 (三十一日馬關にて)

▲日韓交通界に一生面を開きたるものは實に夫の山陽鐵道會社が開

始せる馬關釜山間の車船連絡航路にありと爲す同航路は新造汽船二隻を以て毎日馬關、釜山の兩地點より發船せしめ相互彼我に達するの計畫にして汽車より汽船、汽船より汽車へ直ちに連絡することを得べし、されど現今は未だ其の一隻しか回航せず他の一隻は新造中にあるを以て釜山、若くは馬關より隔日に連絡船の出入ある譯なるが二十日午後九時半吾等が釜山に着せし時は恰かも該連絡切符を求め同停車場構内より小蒸汽船に飛乗りて本船に漕ぎ付けたり。

▲連絡船の名を登岐丸と云ふ一千六百噸にして進水早々九月十一日より開航したるものなり、總電氣を點じ美觀なる裝飾を施し船内は廣く清く實に理想的汽船なりといふべし、一等二等共船室の構造申分無く三等に至るも尙且つ他船の二等と匹敵すべし殊に一等より三等に至る迄各々専屬の風呂ありて乗客は男女室を異にして隨意に入

浴することを得べく一等は洋食二等以下は和食なるが其の待遇の進歩せること又到底他船の企て及ぶ處にあらず釜山、馬關間を僅々九時間に直航して直ちに彼岸に達するを得。他日京釜鐵道破損修繕され且つ東京、馬關間の汽車運轉平時に復し而して連絡船の二隻完備せる曉は東京より京仁へ二晝夜にして到達すべきなり。

▲大田驛より馬關に至る迄、某新聞社主筆某氏と同車同船し日韓問題に就き議論を閉はすの機を得たるが二十一日早朝馬關に上陸するや氏は直ちに門司に涉り福岡に向つて去れり、馬關門司は實に日本の咽喉部にして今後我が勢力範圍の次第に滿韓に延長さるゝに従ひ交通の衝點は必ずや關門に集注す可し、余は登岐丸より上陸、荷物を停車場に托して久し振りに日本の土地を踏み馬關見物を試みたり此の時の愉快云ふ可らず午後二時出帆廣告の第二號發丸にて郷里に向

ほとんどせしが同船は午後七時に至り漸く解纜しぬ。朝鮮にて宴會又は約束に遅刻することを朝鮮的時間なりとし相戒め來りしが、豈計らんや日本に着早々日本の時間の大懸値を喰はされんとは阿々。

から衣名は無けれ共から衣 野月

着けて故郷に飾飾らし

。 。 。 。 。

續出して飾の上の窓窓二つ 晴 旦

附 錄
滿 州 雜 記

附錄 滿洲雜記

▲蓋平旅行記

明治三十四年十月時恰かも滿洲問題の露々内外に論議せらるゝ際余は清國牛莊港に止まりて聊か實地の形勢を観察するの機を得たるが尙一層見聞を博めんが爲め内地旅行の意あるや久し矣會々友人辨髮君商用を帯びて蓋平方面に向ふに當り余に同行を勸む、余快諾同行を約し則ち君と相携わて輕裝觀光の途に上りし也(誓月)

▲其一 奇なる道中▼

▲十月十六日午前第六時、余は辨髮君と相携わて牛莊を出發す、牛莊は洋々たる遼河々口の東岸に有り灣曲せる市街南北に長く河に沿

ふ。東に向つて歩を移せば忽ち市外の郊野に出づ、此處に一條の道あり、而も人の造りしものに非ずして足の自然に踏みしもの也。

北清及滿洲の野、多くは人工を施さず、田圃の間、穀菜の上、人馬の踏むに任せて通行の道を爲す。年々歳々軌同じくして歳々年々道同じからず。蓋し農夫は毎春開墾の際田畝一面に耕作し人は其の上を踏んで自然の路を爲せども冬季米雪の際又之を失ひ、翌年は又新たに耕やし新たに踏んで道すれば也。斯かる奇態の道を踏んで行く、野外の好景を眺め、滿洲の秋氣を呼吸して心身自から爽快を覺ゆ忽ち見る、田圃二三の人家あり、兒童は出で、草を摘み、家雞は俯して餌を求む、側に流るゝ一條の小川潺湲として堤の柳樹の下を行く古き木橋其の上にあり。超えんとして橋の上にあれば風は靜かにして落葉片々水に浮び、草は枯れんとして秋陽徐ろに其の色を照

らむ、野は廣く山は遠く東西南北茫々漠々天地唯だ愛の小春の輝あるのみ、過雁一聲血に啼いて天涯遙かに南行の列あるを見ざりせば嗚呼誰か又秋の哀むべきを想はんや、紅葉は右に野菊は左に咲く、

▲辨髮君は小き鞆を擔ひ吾は短かき獵銃を肩にす、腰に辨當を結びし外には何一つ餘計の荷物なし、脚の運びの速くして二三の村落を過ぎ、正午と思ふ頃藍旗廠と云ふ村に着す、唯ある店裡に立寄りて先づ平ぐる茶一杯、續いて煎草數本を煽ぶ。辨髮君はよく支那語に通ずるを以て店の老爺を相手にして晝食の用を命じ尙ほ嬉々として談笑す、時に一人品よき清人の入り來れるあり、何處へと訪へば蓋平にと答ふ、吾等は幸ひ我等も同じ旅なれば同道すべしとて晝食に取掛る、吾等は日本流の辨當を開き彼は又食物を店に備め、粥を啜ること大椀二杯、一椀の價銀錢三文とは奈何に廉價の食ならずや、斯

くても一日十錢二十錢の商賣はありとて老翁は誇り顔也。蓋食了りて栗梨若干を求め彼の支那人と三人連れ立ちて且つ語り且つ味よ支那の梨は味頗る美、栗は又甘きこと格別にして是非日本の同胞姉妹に土産とすべきものなり。

▲彼の支那人は姓を周氏と云ひ中々面白き男なり、よく語りよく戯れて吾々の旅行を楽しましむ、蓋平に何用ありやと友の問ひに彼は忽ち蕭然と形を改めて語り出づるやう、吾素と山東のものなるが幼き時父に連れられて蓋平に移り辛苦艱難漸く一家を造り上げしか昨年露兵の侵撃に遭ひ我家は壊され財は奪はれ父は傷さへ負ひたれば遂に一家協議の上此の隣村の三道溝と云ふに引き移り今日逃難を避け居たり、然るに人の噂にては蓋平も近時平穩に復したる由なれば恐るゝ行いて家を修めんと思ふなり、幸ひ兩君の同道を得て此上の

安心は無きが若し萬一露兵の難に罹りなば何卒御助力下され度しと語る。余等もいと不憫に思ひて力の及ぶ限り保護の任に當らんことを諾し、種々語りもて行く程に秋の夕日の落ち易く海山寨の下手より遙かに蓋平城を認めたるは其日の午後六時なりき。

▲其二 蓋平城と鼓樓▼

▲蓋平城は沙川の上流水湍き邊にあり、西北の二面山を圍らし東南開けて遠く海に臨む、昔周の代には朝鮮に屬して本の辰韓たりしが秦の代燕人衛滿なるもの之に據り漢に至りて元菴郡に屬し魏、晋を経て高句麗に征服され再び朝鮮領となりしが唐に及びて改めて蓋州と命名し其後尙ほ種々の變遷を経て清朝に至り蓋平縣を置き奉天府に隸屬せしめたり沙川又の名蓋州河は河口に便利なる一碼頭ありて貿易に便なり蓋平の人口五萬と稱すれ其密かならず、城の四方に門

を設け速ぬるに堅固の城壁を以てす。北京城の規模小さきを見るが如し。南門の城外又繁榮の市を爲せるが露兵の外には外人を見ること稀なれば余等一行の着するや忽ち人の山を築き人馬の驚躁犬の狂號難有からの大歓迎を受けたり。南門を入つて大街を過ぎ同行の周に別れ余と辨髮君とは左折して東門内洪興號と呼ぶ家に着す時當に七時。

洪興號は蓋平の巨商にして吳服反物を賣り綿絲生糸を商ふ店なり、辨髮君は即ち其の生糸を買はんが爲めの商用也。生糸と云ふも實は山繭の糸にして我國の杜鰲絲と稱するもの之れ也。店の掌櫃的即ち我國の支配人は姓を李と呼び悦んで二人の珍客を迎へ歡待優遇到らざるなし、酒肴運ばれ酔ふて故郷の花を夢む。

▲翌十七日、早朝起き上がりて朝餉を済まし辨髮君と連れ立ちて城

内巡覽に出掛く。市街の西に澤山の佛寺あり。格別眼に止らざれば北門内の山東會館は流石に弘壯美麗なる。此日恰かも北京下りの京演劇が此の會館にて開演中なりければ吾等も暫く入りて見るに數千の見物悉く眼を轉じて日本人を珍視し役者も少時齣を中止したるが如し、支那の劇は悉く亡國的腔調を帯び之を見るもの又等しく亡國の色あり。國家危急存亡の際芝居を見ながら時分を慨するが如き何たる痴態ぞや、現に彼等は吾等二名の日本人を見て頗る意を強ふせるが如く嗷々哈々口を極めて露兵の横暴を罵り日本の正義を賞揚し聽衆皆同して大喧囂を極めたるが聲をすれば影とやら此の時五名の露兵銃劍の儘巡廻し來り、多衆を叱咤して殺到す、然るに忽ち吾等二名の日本人あるを見て大に怪訝の面色して凝視、私語、少時にして立ち去りたり、露兵の去るや支那人は又群衆し來りて日本を褒め

露西亞を罵る。中に二名の支那紳士あり辭を低ふして余等兩人を招き席を設けて觀劇を請ふ。請に任せて座に就けば該紳士は非常の名譽を擔ひたるものゝ如く余のステッキを振り舞はして前なる支那人を追ひ拂ひ以て吾等の觀劇に便ならしむ、丸で御殿様の芝居御見物と云ふ姿なり。劇は種々滑稽のものを演せしが中には猥褻極まるものを演じて支那人の大喝采を博するなど殆んど見るに忍びず、少時にして席を起ち厚意を謝して會館を去り、西又南に折れて中央の鼓樓に出づ、鼓樓は城内大街の十字に出會ふ交叉點にあり、煉瓦及び石にて築き上げたる高樓あり四門を設けて東西南北の四街に通ず。余等壁を攀ちて樓上に登れば中央には甬に向けて關帝を祭り傍に鐵を据わて不時の警報に具ふるものゝ如し、荒敗毀損頗る狼藉を極めたるは露兵の侵害此に至れるものなりといふ、孔子の言や關帝の腹

など散々突き破られたるを見ては偶像を信ずる支那人の激怒左もこそと察せらる。慘又慘。

▲鼓樓と城門とは共に數丈の高さを有す、硬き煉瓦もて築き上げたるものなれば古しと雖も尙ほ堅牢なり。城門に處を破損の跡ある、鼓樓に點々彈痕を印するなど、奈何に蓋平城が幾多敗戦の恨みを作めたるかを想見すべし。若し夫れ古色蒼然たる廢家の跡、塵々として食を求むる喪家の狗市に滿つる光景に至つては吾之を鼓樓より觀るに忍びざりき。あはれ亡國!!!

▲其三 日滯人の會食▼

▲鼓樓に亡國の秋を弔して宿に歸り來れば何處より聞き傳へたるにや知縣の官吏談國治なるもの其の同僚任組均と共に來りて我等を快ちつゝあり、蓋し辨髮君は以前談と知己なりつればなり。余は初對

面なれ共彼等は挨拶感應にして互に由來の職あるものゝ如し。談は
 年齢三十才、頗る活氣に富めるが如く任は今年四十有三年、平々凡
 やとして馬輪を加わたるものゝ如し、談先づ問ふて曰く爾公何用あ
 つて當地に來られしやと、辨髮君は商用を以てと答ふ。彼又余に問
 ふて曰く貴公姓は照崎何を以て替月と號するかと、余答へて曰く替
 て月を見て感奮する處あり替つて號となす敢て問ふ貴君姓は談名は
 國治當に大に時事を談じ以て國治を謀るべし君の心事果して奈何と
 彼眼を圓ふして曰く其の名其の實に背くこと甚し、吾頗る之を慚ぶ
 と一座哄笑す。

▲主人酒肴を出して饗應す、談任共に辭せんとすれ共得ず相共に席
 に飲ましむ。談は替て北京に在り其の發音優調にして滿洲地方の俗
 調の中にありては恰かも我が東京語を田舎の村裡に聽くが如し、余

は酔ふて詩を吟じ任は悦んで屢々箸を落す、若し辨髮君の支那學に
 至つては既に妙境に入れるもの本家本元の支那人をして速戰速敗席
 に顔色無からしむ。店の番頭手代等皆集り來りて此の前代未聞の珍
 席を眺めんとするものゝ如し。主人或は余等の感情を察せんことを
 恐れ起つて悉く散じ去らしむ。斯くて宴は一府の盛を加わ午後三時
 に至りて一先づ已めて飯を喫す。談曰く、爾君之れより駕を枉げて
 我家に至れ、粗酒寡肴以て聊か旅情を慰めん、又可ならずやと、余等
 辭すれ共聽かず且曰く此事敢て無用の酒食に非す一は貴我兩國人の
 交情を温め一は今日の時事に就て聊か教を受け度きものあるなり枉
 げて我が請ふ處を容れよと、余等重ねて辭す可らず、乃ち其の旨に
 従ひ、家の主人と共に總勢五人相携わて門を出づ、沿道の人々悉く
 視線を衆め日消兩國人の親睦に謳歌せんとするものゝ如し。

▲途上一隊の露兵に遇ふ、眼を側立て、吾等を睥睨す、豈敢て憚らんやと平然として高談笑語す、摺れ違つて行きたるに彼等大に戒心するものゝ如く暫く立ち停まつて此方を凝視せり。總て一同談氏の家に着すれば犬は吠へ家人は驚いて狼狽せるものゝ如し、談氏先づ入つて我等を其の室に迎へ、茶菓談笑暫く時を移す内酒肴持出されて圓陣頓に形成し酒盃頻りに飛び談笑室に湧く。誰か端無く露兵の事を言ひ出し口を極めて罵るもの鴈を絞つて慨するもの相繼いで絶間無かりしが余は大に酔ひたるを以て黙して壁に據れば談は來りて肩を叩いて曰く。「貴公何故に黙するや余が教を聴かんと欲するは即ち此に在り。願ふに甲午の役は東亞未曾有の大戦にして一旦兩國の平和を破りたるは貴我兩國政府當局者の罪也、兩國人民に至つては何の恨か存せんや古來同文同種の民宜しく交誼を厚ふすべき也、今

や俄國勢力強盛中國に迫つて滿洲を割取せんことを、滿洲一度割かれれば清國忽ち覆らむ。清國亡へば貴邦亦易んぞ安きを得むや。即知る滿洲のことは清國存亡の問題にして又實に貴邦安危の問題なるを此時に於て貴我兩國人相聞せず相信せず慢然他の爲す處に放任すれば東亞の將來當に量る可らざるもの有之んとす我等微力と雖も平素私かに此事を憂ふ。時會々公等の來るあり豈敢て請はざるを得んや冀くは我意を諒せよ。酒々として旨旨明瞭、余大に其の雄辯に驚く。答ねんとして心中聊か苦思する際他衆來り冒して復た席に就き盃更に擧げられて諸ふもの踊るもの例に依つて隔々たり。日清兩國人の會食程賑かなるは非ざるべし。夜半月を踏んで宿に歸る。

▲其四 露兵の襲來▼

▲十八日、辨髮君の商用忙はしきを以て半日を共に室に籠る。午後

連れ立ちて又運動に出掛く。今日は城壁の上を散歩せんとて東門より踏み登る。蓋平の城壁は高さ三丈巾一丈半にして北京天津のものよりは規模小なり。登りて見れば其の荒廢非常にして殆んど通行す可らざる所あり、辨髮君は身體輕捷よく敗殘の壁上を沙りたるが積かんとせし余は誤つて滑りアハヤ三丈の壁下に墜ちんとせしが運よくも他の棟瓦に手をかけて僅かに支ふことを得たり。斯かる危険は再び冒す可らず。余は之より敗壞の箇所ある毎に降りて更に向ふの壁に攀ち登るを例とせり幸ひに無事壁上を縫ふて南門に到達することを得たり。

▲南門には高き城閣あり、上ぼりて視線を延ばせば東方里餘の畑中に一個小高き塚山ありて中腹に松の林をなし其の間幽かに堂宇の見ゆるあり。而して山の頂上には高き五重の塔聳也。余等明日彼の山

に登らんことを約し門を下りて右すれば蓋平駐屯露國軍隊の假營所あり一小隊の歩兵訓練を爲す。暫く窺見して道を轉じ歸路に就く。路傍に標札あり、聖教會と記したるは耶穌寺なるを知るべし、斯かる山間にもと不圖物敗奇に其の門を滑れば中には廣き會堂あり、數百人を容るゝに足る。日本の會堂とは迷ひ色々の繪など壁に飾り信者△△の心を物質的に導くやう造りあり。色々其の模様など眺むる内、奥より聲かけて辨髮君の名を呼ぶものあり、願れば白髮美髯の老紳士其の温容を表はして來り近づけり。辨髮君は進んで握手の禮を爲し且つ吾を紹介す。老紳士は眼光を吾に轉じ光と愛を放つて余に初めて握手の禮を爲す。名はセームスカーション氏英國の貴族にして支那語にて自から蓋雅仁と名乗り其の夫人と共に北清に止まること二十有六年英國長老教會派の監督牧師なりと云ふ。余が未熟の英語も時

に取つての愛嬌なれば氏は太く喜びて何は兎もあれ室に來れと云ふ
 隨ひて奥なる一室に至れば椅子チーブル粗米なれ共應接の備を爲す
 氏は其の本據を牛莊に構わ、海城、奉天、蓋平等要處々々に會堂を
 設け時々巡廻して傳道に従事する由、余が牛莊にて未だ見ずして此
 處に偶然邂逅せしこと寧ろ奇と云ふべし、種々談話の末氏も亦明日
 余等の郊外散歩に同行せんことを約し一先づ其の門を辭したり、家
 に歸りて晩餐を喫し第三日目の夜眠に就く。

▲夜は更けたり、凡そ午前の二時頃と覺ゆ、枕元にて切りに叫ぶ聲
 あり、眼を開き見れば主人番頭皆余が枕頭に集まり提灯を照らして
 相評議しつゝあり、何事かと問へば慄ふて答へらく露兵來つて今門
 を犯す兩君を求むるものゝ如し之を奈何せん、余詰つて曰く門既
 に取れたるか、曰く未だし中より漸く之を支ゆと、余熟考するに我

等當地着以來途上屢々露兵と遭ひ又談の家に向ふとき我等に戒色せ
 る一隊ありしが之れ畢竟吾等を例の國事探偵と疑ひて夜中密かに拘
 引するものならむ、辨髮君は萬一の協合清人視せらるゝ不利益あり
 如かず余一人難に當りて安危を決せんにはと、即ち起き上がりて洋
 服を着し帽を戴き靴の紐締め且つステッキ迄携わて萬一の協合に後
 れを取らぬやう用心少しも怠り無く門に至りて眺むれば店員小僧皆
 集まり力を極めて門を守り露兵は外より虎嘯して鐵鎗又は銃劍にて
 亂打すること雨の如し、余小僧を制止し家人に命じて門を開かしむ
 家人危ぶめ共余聽かず。洋服白帽袴さへ伸びたる余が洋燈點して勢
 ひ靜かに立ち出づれば外面には數多の露兵眼を睜らして銃劍燦爛と
 火光に映するを見る。余は大喝一隊露兵の膽も裂けよと計り、夜中
 無禮もの奴!!!と日本語にて號令的に詰問すれば………箇は奈何に

彼等は案に相違せるが如く形勢頓に一變して且つ驚き且つ感ふもの如し。顔見合せて敢て一言を發するものすら無かりしが兵士の後方より肩に露の徽章着けたる傭の通譯(支那人)あり漸く出で來りて貴公は眞正の日本人なりやと支那語もて問ふ、余が然りと明答すれば此時露兵も怖をど何か評議を始めたるものゝ如し。一人あり。横より來つて余が帽を奪ふ、余顧みて大喝叱咤直ちに之を奪ひ返せば彼は驚いて退く。露兵は始めて余が散髮の日本人たるを了解し大に安心せしものゝ如く中には來つて握手の禮を求むるあり、通譯は更に此場のお茶を濁さんと愛嬌よくも屋上の瓦斯燈を指さし「燈火滅し居れば規則に據りて起し戒めたる也、速に點火せられよ」と云ふ家人即ち點火すれば彼等一同は満足したらんが如く余に敬禮して立ち去れり、危かりき辨髮君にして此處にあらば必ずや非常の厄に遭

ひたるならむ。余は家人に命じて門を閉ざしめ室に退きて再び夢の枕に就く。

▲其五 塔山の眺望▼

▲十九日、人々起き出で、話柄に上るは昨夜の露兵の話なり、聞けば露兵は夜中巡邏の際富有らしき家を撰びて自から軒燈を吹き消し乍ら門を亂打して家人に點火せしめ其の際罰金として必ず金錢を強請し若し應せざれば必ず擲亂打して去るを常とする由なり、番頭曰く多少の間金尙ほ忍ぶべきも其の毆打に至つては忍ぶ能はず、昨夜は貴公の助力にて其の難を免かれたりと。而して余の勇氣を激讚し流石は日本人なりと云ふ。支那人の客を利用すること思む可しと雖も其の心情や寧ろ憫むべきものあり。余は笑つて余が其の時の決心を語り事の餘り馬鹿らしさに却て眼合ひ抜けしたりと言へば辨髮

君は南無菩薩……お蔭で厄を免かれたりと己が辨髪を撫で廻はして嬉々たり。呵々。

▲セームスカートの蓋先生は午前九時頃早や來訪して共に歩を起さんと云ふ。家の小僧辻ッかり烟草一本拵げたるには先生頗る御迷惑相なりき三人連れ立ちて家を出で東門を抜けて尙ほ東を指し城外の小市街を離るれば一面の田園也。秋既に老いたれば殺業悉く成熟し農家の人煙亦愁眉を開けるが如し、カーソン氏は二十有六年の老支那通なれば其の語學の熟練驚くべく途上逢ふ丈けの支那人を捕えて一々會話を試み遠近の事情、生活の形況等細大問ひ盡さいれば已まざるの風あり。余等兩人をして其の長廣舌に驚かしむ。氏は又今年の夏其の夫人と共に日本に遊びし由にて我が風光の美を賞し國民の品位を論じ時にはお世辭お退從にはあらずやと疑はしむることすら

あり。兎に角口も速者、脚も速者にして早や何時しか山の麓に來れり、其れより歩を一轉して次第に斜めに登り行く。秋の山草深くして虫は驚き木の葉散るなど中々に趣味あり、山の中腹に到れば翠綠深き松の林にして昨日南門より見たる堂宇は今其の縁の蔭に表はる往いて門を叩けば小僧番人驚いて背房中に潜匿す、冢一頭、杭につらされて鮮血淋漓、今當に其の腹を割かれんとする處なり。寺の中に坊主が冢の荒料理、日本ならば差向き破派の極とや言はむ。

▲寺は小さけれ共頗る雅なり、四邊の松影殊に其の景を加ふ。余等本堂に入りて呼べ共更に答ふるものなし、強ひて尋ねるの要もなければ歩を轉じて直ちに山頂に向ふ、嶮はしき坂を登り行けば草茫々たる山の上に五重の塔の高く聳ゆる美しくしき、近づいて之を熟視すれば豈計らんや、塔は之れ五重に非ずして小さき階段の十四層なり

き、形は正八角型にして下に大なる礎石を埋む、八角の八面悉く皆
畫の彫刻あり、其の周圍を一周して讀み行けば蓋平の進士何某、同
秀才何誰など徒らに多く名を列べて建立の勞を誇り且つ此の山を古
來塔山と稱する山などを記す。

▲塔の南方に少しく小高き土山あり、其の上は草滑らかにして座し
て西南の平野を一望すべし、遠々として緩く流るゝ沙川の水は。清
く澄みて楊柳の下を滑れ共水く平野の間を流れて海に合する邊は湖
々として激浪又泥色を帯ぶ、其帆白帆幽かに海に浮べるものは翻々
として鳥の自由に遊ぶが如く、黒烟一條南に向つて走る影は機械の
働く汽船をして眞に天工の美なるかと疑はしむ。人は離離として地
上に俯へる蟻の如く冢は骨々として畝に轉がる芋に似たり。牛馬格
駱荷を積みて歸るを見れば遙かに追ひ行く船と相對照して眞に南船

北馬の文字を活躍せしむ。畫中を抜け出でし支那鳥、其の色鶴に似
たるが翻々として高く舞ひたるに、奈何なる風に誘はれてか近く飛
んで余等の頭上を行く。秋陽靜かに鳥の上にありて影は小さく余等
の膝に移れり、睛ふ見よ、セイムスカイツン氏は伏して脚の思慮に
感謝しつゝあるなり。唯か塔山の絶頂に亡國の秋を歌ふものぞ。
▲時に忽ち露々又霖々の響きあり、汽笛一聲渾然として露國の東清
鐵道は南方森の陰より長蛇一火を吐きて今此の蓋平を一呑みに遠く
北に逸せんとはするなり、嗚呼美は壞れたり。夢は破れたり。滿洲
の野は腥風吹き荒み血雨降らんとはしつゝある也。

▲其六 護照の問答▼

▲露の東清の大鐵道、長蛇の北に走るを見て余等は起つて駱路に就
けり、下山は路を山の南面にとり漸く麓に着きし頃、唯ある小松の

森の影に三個の少女打俯して、共に顔を掩へるあり、年齒何れも七八歳、小さき熊手もて落ちたる松葉を拾ひ集めんとす。其の戦く乎、其の震ふ髪、正しく余等を異邦の鬼と思ひ恐れしならむ。可憐の少女よ、余等は人喰ふ鬼には非ざれば安心せよと言ひ度けれど却て彼等を驚かす事もやと遠慮して其の前を通り過ぐれば傍に一人の老婆あり、余等を眺めて叩頭の禮を爲す、舌長きカーソン氏は奈何でか之を通すべき、滑稽なる話語は顔を衝いて出で老婆を勞はり且つ慰さむ、老婆も大に安心して語り出づる節の面白ければ前に懼れし三人の少女さへ俯ひ上がりて老婆の影に集まる、斯は皆老婆の孫なりと云ふ。老婆は早くも余等兩人を日本人と認め嬉々として語り出づるやう「先年日清戦争の際は日本の大軍此の地に押寄せて我等は生きたる心も無かりしが戦闘止んで後はそれはく、難有き掟を布かれ

民は皆安んじて其の塔に就き殊に我が夫はよき商賣をすら授かりて親子一族難有く春を迎へしが其れも少時の夢の間にて今は開くさへ恐ろしきオロスの兵に攻め取られ何も辛い事計り嗚呼モウ此の世は厭になりましたア日本の兵隊さんでも矢張りオロスには叶ひませんかいナア……と、嗚呼何たる悲痛の語ぞ。性來多威多俱の余は早や眼に涙せんとす。幸にカーソン氏は老婆を慰め少女の未來を脱したれば彼女も漸く涙を拭ひ、其の孫娘の頭を撫で、日本人は善き人なりと訓め、嬉しくもあり又悲くも、餘り切なる老婆の言葉に名残は口に盡きざれ共已む無く立つて別るれば悄然と立つて見送る老婆、首を伸ばして少女も共に。嗚呼天よ、幸せよ。

▲余等路にカーソン氏と別れ宿に歸り着きたるは時當に午後の一時なり、空腹を抱へし後の飯の甘さよ、假令支那の料理は油臭くとも

▲余等滞在數日、辨髮君の商用も略々済みたれば今日は辭し去らんと云ふ。店の主人聽かずして尙ほ切に一口を強ひ。曰く明二十日は陰曆九月九日恰かも登高之節に相當すれば是非停まりて歡を共にせよと、店員小僧皆主人の命を含みて余等の荷物を隠して出さず。已を得ずして又一口を延ばす、時に人あり來つて刺を通す、曰く蓋平駐屯露軍通辨王逸章又一名は露國の下士官某なりと、扱てこそ先夜の御返禮かと迎へ入れて座を與ふれば彼等は先づ慙慙に余等兩人の姓名を問ひ、且つ曰く爾君當地に來らるゝは何用か又た何時迄滞在せらるゝかと辨髮君は通辨に向ひ商用にて來り居れる旨を答ふ、彼曰く近頃當地方馬賊出沒して其の難に罹るもの多ければ若し萬一の時特に露軍の保護を爾君の上に加はんが爲め敢て長官の命を帯びて來り防へるなりと、余等其の懇親切を謝して曰く「高意を空うする

に非ざれ共余等既に用事了りて明日常に出發すべければ折角の御配慮に及ぶまじと答ふ、彼曰く、承了、若し護照を持たるれば幸に就て拜見することを得んと、蓋し護照なるものは各開港場の領事より特に内地旅行する外人に與ふる照章なれば之を示せば支那官吏は實際條約の禮によりて相當の保護便宜を與ふべき義務あるものなり、れど今之を露兵に示すは頗る罰れ無きことなれば、余等拒絶して之を示さず。彼等も遂に強ふること能はずして立ち去れり。店の主人は非常に憂色ありしが此の體を見て安堵せるもの、如く又々酒宴に移る時知縣の官吏缺任の二人も來防し最初の口道連れとなりし周と云ふ男さへ尋ね來りて一座大に陽氣を増せり。

▲其九 汽車にて歸る▼

▲十月二十日、今日は陰曆九月九日にして愈よ名殘の日となりぬ、

店の主人は頗る面白き男なれば今日は朝より飲み續けて大に行を壯んにせんと云ふ。支那人は總てよく飲みよく勤むる癖あれ共今日の奢りは一方辨髮君との商賈に少からの利益の算入ありしが爲めなるべし、儘よ汽車中睡ればとて拘換の恐れもあらざればと度胸を据わて大に受く。盃重なれば恍惚として夢の如く此の大亂の秋に居て太平の春に醉へるが如し。正午に至り余は席を起ち庭に出で、暫く秋を弔ひたるが辨髮君は一献一酬悉く敵の驍將を倒して天晴日本武將の驍名を現はしたり。午後五時に至り盃を納めて山立の用意をなし別を家の一同に告げ二三の店員に送られて蓋平城を南に出づ。停車場迄一里の間、赤き高粱。黄なる豆畝。處々莖を切つて芋を掘り取る農夫もありて夢に樂園を辿るが如し、道に流るゝ小川あり、驍馬一頭其の邊に水飼ふ。余は少しく乗馬の嗜好あれば其の主を呼んで

談判し直ちに乗つて一鞭當て勢ひ鋭く停車場に乗り込む。露兵驚いて道を開く。其の間を乗り廻して再び三度び停車場に往復する時馬の主人驅け來りて馬と賃とを收めたり。纏がて辨髮君は支那人に送られて來り此處に少時待つ程も無く今朝旅順を發せし汽車は長蛇の踰るが如く來りて停車場に着したり。余等二等切符を購ひて乗り込む室は第一等、并は洋服着たる外國人が當然の習慣にして切符通りの室に乗れば穢なき火けが馬鹿損也。

▲午後七時蓋平を發車す、見送る人を見返りて名残を互に交はす時夕陽既に地に落ちて九月九日の半玉兎深々として東の空に浮べるを見る。蓋平城は朦朧として烟閉ぢ込む彼方の山の麓にあり。鼓樓は奈何に。塔山は奈何に。

▲一等室には余等の外に五名の露國士官あり、旅順より哈爾濱に向

ふものと思はる。此の列車は眞直に哈爾濱に向ふが故に余等は大石橋停車場にて牛莊行の列車に乗り換へざる可らず。其の列車は奉天より來りて大石橋に出會ふものにして九時に着すべき筈なれ共野蠻なる露西亞汽車なれば遅れに遅れて午後十一時漸く北より來着せり余等其れに乗り換へて牛莊に向ひたるが此の一等室には露國の婦人三名あり。其れに付き魁ふ士官六名、奴隸の如く侍づく有様は乞食の王者に向へるが如し、六尺有餘の大男婦人に對するゾレカ加減は官語同斷、斯くてこそ我が醜業婦の遠征に着々陥落するならめと察せらる。三名の婦人も何となく品格無き女にして其の官語動作恐くは醜業婦の仲間ならむ。されど要無きことなれば其の研究は抜きになしぬ。

▲汽車と共に夜は次第に更け行きて意に蒸気の凍るなど早や北方の

寒冷を覺わぬ。翌午前一時牛莊停車場に着すれば汽笛一聲換換して滿洲の毒蛇茲に靜かに眠らんとす。余等停車場にて人夫を備ひ相飛めつゝ歸路に着く。停車場より遼河に沿ふて下ること二哩半。月は没して夜は暗く。天地突々、草茫々、唯水聲の滔々として幾千年來の盛きの調へを奏するのみ。地球靜かに一轉して早や夜は幽かに明けんとし曉告ぐる雞の聲遠近に聞ゆる比漸く牛莊市街の家に戻る。時は十月二十一日午前第四時なりき。

▲満洲の烽火臺

之も亦戦前満洲旅行記の一節に加ふべきものだが、餘り冗長に沙
るから他の數項は省略して烽火臺の一項だけ掲げるとしやう。處
は營口の奥の大石橋にあるのだから旅行者は昇つて見られるも妙
だらう。

▲娘々廟

ニヤン／＼メウ

と首つて有名な臺が大石橋の北の山上

に建てられてある此の神様は緑の神で、日本で言へば出雲の神様だ
遠近の男女毎年此の廟へ参らぬものは所詮縁附くことは出来んと首
つて中々信心するのである。此の緑の神様の背後に當る山の頂上に
烽火臺の跡があるのだ。時は恰かも三十四年の十月だつたが僕等は
同勢七八人何れも血氣の日本男兒のみが牛莊より大石橋へ遠足旅行

を試み、序手に此の上へ押し登つたのだ。娘々廟で熱心に祈願を促
める誰やらもあつたが君は支那の婦人を妻に祈るのかと問はれて……
……ウム矢張り日本の美人がよい、此處から出雲へ願かけて居るの
だなど洒落れて大笑ひをしつゝ一同庭に腰打かけて暫時休憩した。

▲拔驅の功名

處が僕は唯一人寺の横なる扉を開いて畝に小便し

て居ると其れから恰度よい様に背後の山へ道が出来て居る、上の方
には殿も見ゆる。景色がよいやうだ此奴は面白い、登つて見やうと
不圖好奇心を起して誰にも告げず唯だ一人其の儘ノコ／＼登りかけ
た。處が思つたよりか坂も峻はしく、漸く草や木の根など曳いて登
り行く程に、秋とは云へど日中は暑くして不覺頼に汗する程であつ
た。随分呼吸も忙はしかつたに相違無い、漸く殿の上迄行く……
……斯は奈何に……殿の彼方に幽霊の化物が一匹ツクツク立つ

て居る。眼計り光らして此方を睥んで居るので、狐狸か……幽霊か……一つ撲つて見てやらうとステッキ構わてザリ／＼と詰め寄り、喝一聲……御面Ⅲと打込んだら確かに手應へして化物は殿の下に落ち轉んで又起きて下の方へ狐風々々と逃げで行つた、或は人らしいもあつたが多分狐狸だらうと思ひ。序手に此の山の上に何が居るか今少しだから登り詰めてやらうと飽く迄負けぬ氣を出し、勇氣を鼓して脚踏み占めた。其れからの路は存外平易で躑がて山の絶頂に至れば此邊樹は無くして草茫々と一面に生ね、唯其の中に一本の古木が奈何にも歴史を語り度さうに立つて居る。而して其の古木のお隣りに石を積み上げて小高き城壁様のものが造られてある。之れが即ち昔時の

▲烽火臺の跡

で昔戦國の時代には之を以て相圖の利器となし、

敵軍攻め寄する時又は非常を示す時、此上に烽火を揚げると其れが次の山から又次の山へ、次第に本陣迄傳はつて行くのである。故に滿洲の山には要害の各所に此の烽火臺の跡が遺つて居るそうだ。土人の説によると烽火の相圖は實に迅速又巧妙で今の電信位には間に合ふと言つて居る。免に角此の烽火臺の跡は奈何にも戰國誌的で支那の古代の英雄傑を思ひ起さずには居られない。詩人に見せたら定めし喜ぶことだらうと思はれた。

▲時正に午後一時

時計を見てから急に空腹を覺ゆるやうだ幾ら待つても誰一人横いて來ないから拔驅けの功名今は却て心配の種となりノコ／＼山を降りて再び以前の娘々廟へ歸つて見たが……誰も居ない、愚圖々々其邊を廻つて居ると寺の小僧が指し招いてお連れは下で晝食を喫べてお出でなさると云ふ。自分も腹が減つて居る

から急いで其の場へ下り行けば一同喫驚して君は一體何處へ行つたのだと云ふ、時に。

▲一人の坊主　　が矢庭に僕の袖を捕へて喋々喃々、狂するが如く腑ふるを聞けば此の坊主こそ先刻僕が巖上で撃退した大入道で、之は奇也妙也とよく／＼話を聞いて見れば彼は此の寺の坊主で今日しも巖を探らんとて山へ上つて居ると、下の方から洋服姿の異邦人が勢ひ鋭く登つて来るので、扱ては地獄の鬼かと膽を潰ぶしブル／＼震えて居る處を、スラツキもて打ち込まれ、巖から落ちた時には死んだと計り思つたが、夢中で逃げたものと見れば、生命辛々寺迄來て見れば箇は奈何に寺にも深山異邦の鬼が居るので、今日こそ寺も人も殺されて了ふのかと驚いたが、段々様子を聞いて見れば余等が日本人であることが分り、近づいて話して見れば何も恐ろしい人では

無く、斯んな嬉しいことはないと云ふ。それならば山で一宵物でも宵へは善いのに唯眼計りギロ／＼光らして丸で幽霊のやうな面をして居たから、此奴は屹度狐狸の化物だと思ひ打つて見たのだと宵へば、中々物を宵ひ所の暖さではなかつた……マア生命があつて仕合せだと苦しそくに呼吸をついて居る、見れば頭に大きな瘤を出して確に僕のステツキの跡を印して居る。今更哉だ氣の毒だが仕方が無い、果ては一同大笑ひで済んだが済まぬのは僕が抜驅の功名だつた。

▲掛食後烽火臺

へ再び登らうと云ふ動議が出た、僕は何等見る程のものはないと言つたが多勢に無勢で叶はない、遂に復た登り行くことゝなつた、併し登つて見れば頂上の眺めは又格別である、樹の下、烽火臺の影などに腰打掛けて休憩し四方の景を眺めつゝ談話

して居ると秋風強ふ吹いて肌に冷を覺ゆる計りである。或者は俯して石を運び或ものは起つて秋草を引いて居るが、桔梗、撫子、女郎花等は支那にも咲いて居るのである。更に眼界を一轉すれば彼方に見ゆるは大平山、甲午の役に我軍の奮闘せし處、その北に少しく低き小平山、連岳の名残を平野に止めて居る。小平山の向ふは茫々たる滿洲の平野にして遼河の滔々として流るゝ處、幽かに黒煙を吐いて居るのは牛莊港だ。轉じて東南の方面を眺むれば墨々たる重層遠く連なりて千山萬岳の果てにや虎は棲むであらう。秋風冷かに遊子の腸を洗ふ時、過雁一隊血を吐いて一陣の行列天に無韻の詩を作つて居る……………。

▲鴨綠江の筏

▲鴨●綠●江●の●材●木● は實に廣大無邊にして其の種類も亦頗る多い、即ち赤松、杉松、黃白松、落葉松、紅鱗松、黃鱗松、柞、楡、檀木及び胡桃、楊、楸等の雜木にして就中赤松、黃鱗松等が最も多く採伐されて居る。さて此等の材木は毎年解氷期即ち三四月の頃より斧を入れられて八九月雨期の頃鴨綠江が出水するに乗じて下流へ押出さるゝのだ。其の際始めて組合せ普通二百五十本を以て一筏となすのである。

▲長●短●及●速●數● 材木には丸材と角材との兩様あるが丸材は概して細長く角材は多く巨材より取つて居る。併し乍ら中には本口二尺乃至三尺徑にして長さ四丈五六尺に達する大丸太もあれば切口七八寸角にして長さ八尺に過ぎざる角材もある。其れから材木は丸角に不

拘切口尺角乃至尺徑にして長さ八尺のものを一連と稱し之を單位に何百何十何連と數わて居る。されば四丈の材木は五連にして四丈四尺のものは五連半である、普通二連角(即ち十六尺もの)三連角(即ち二丈四尺もの)等が最も多い。又之を噸數に換算する時は三連で以て一噸と相場が極つて居るのである。

▲正字號と雜字號 材木には皆其の所有者の銘を打つ、元來鴨綠江の材木は官林なれば最初之を伐り出す時入斧税と稱して一定の税金を納めて居る、税金は一本に就き三十錢で後ち後となして流下する時税關で關税を拂ふ時も此の入斧税が標準となるのだ。されば入斧税を納めたものは其の伐り出した材木に自己の銘字を打ちて證となし集めて筏に組みたるものを正字號と稱するのだ。斯く所有が分明し規律が鮮明ならば何にも面倒は起らないのだが數多い伐採者が

甲の谷からも乙の山からも切り出すのだから其れが混交せずに居る道理が無い。少し下流になれば滅茶々に混交して甲乙丙丁の分を取り合して筏を組む、之を雜字號と稱するのだ。而して筏の多くは正字號にあらずして雜字號なのである。

▲分捕主義 掠奪主義 上流より流れ来る材木を途中で殺も由緒も無き奴が熊手を以て松葉を引掻く様に引掠め其れを集めて組み合せ立派な筏が出来るのである。スルと上流にある所有者は自己の材木が流下せるを知りて次第に尋ね來り途中妙な奴が盗んで居るのを發見するや直ちに其れを差押わ筏を切崩して自己の方へ合併して了ふ而して今度其の所有者が愈々筏として下流へ押下す際には途中で例の馬賊又は山賊が待ち構わて居る、馬賊は大抵銃劍で以て脅し附け、物よりは金主義で一筏に就き何十兩と云ふ税金を課する、若し命の

儘に納むればよし左も無くば直ちに人命を絶ちて其の筏を奪つて了ふ。尤で馬賊と云ふ政府の税關見た様なものだ。斯く酷い目に遭ふものだから彼等も大抵武器を用意して萬一に備へ、萬一口分等よりも弱い山賊が来たならば大に反抗もするけれ共凡そ山賊でも仕やうと云ふ奴は大抵圓太い奴に限つて居るから滅多に武器の効を奏することはない。

▲最終は大東溝

斯く途中にて分捕主義や奪掠主義に苦み散々な目に遭はされたる筏は慈城と安東縣で税金を拂つて其の所有權を確かめられ遂に大東溝に出で、茲に支那商人との間に賣買せらるゝのである、賣買の相場は色々で又年毎に多少の高低もあるが大材になれば一本で以て三十五六兩乃至四十兩のものがある、之は悉く赤松で杉松、黄鱗松は大材二十七八兩より下つて十四五兩中には二三兩

ものもある。販路は重に芝罘、天津、營口、旅順、大連、滿洲地方にして鐵嶺以北は大概吉林材木を使用して居る。

▲材木商の本場

鴨綠江材木商の本場は大東溝、安東縣の二港で從來取引の割合は安東縣二分大東溝八分と云ふ比例であつた、何しろ大東溝の取引であるから毎年芝罘及天津より材木商が數百人大東溝及び安東縣へ出張して盛んに賣買を營んで居る。中には奉天及營口地方より出掛くるものもある、そして此の時に限り芝罘、天津より藝妓、娼婦の入り込むもの多く爲めに大東溝、安東縣は非常の殷盛を極むるそうだ。

▲日露開戦前の筏

明治三十六年の夏より露國が盛んに龍巖浦經營を始め同時に露の森林會社が鴨綠江一圓の材木伐採權を得たりと稱して外國人及び韓人の材木所有を認めなかつた、日本の方でも俄

盛公司等一二權利者が現はれて頗りに其の所有を争ひ遂に鴨綠江の筏の上に日露兩國旗を樹立するてふ奇觀を呈したことがある。日露對戦は既に此の時より行はれて居たのである。兎に角有利なるは鴨綠江の材木で莫大なるは其の上流の森林である。

▲戦後の安東縣

▲龍巖浦より安東縣

龍巖浦より數十哩の川蒸汽船にて鴨綠江を遊れば約二時間にして安東縣に着くのだ、此の間江の兩岸には清韓人の家屋點々或は兩國人民の出で、河畔に耕せるあり、河岸線は概して高低少く奇觀に乏しいけれ共左右に遠く連山の起伏せるを窺み江上には支那人のジャンクに帆を揚げて上下するあり又韓人の楫を推してアツ、ンを流ふあり水漫々岡漠々として奈何にも大陸の景色である、龍巖浦より西に安子山東に龍化山を見て娘々城を過ぎ三道湍より柳草島の岸邊を遊れば艦がて安東縣へ着くのである。安東縣は唯も知る如く鴨綠江の右岸清國側にありて江畔第一の繁華をなして居る、昔は義州最も榮わたりけれ共日清戰爭以後安東縣は俄かに樞

要の地となりて義州及鳳凰城の繁昌を奪ひ百貨集散の中心點となつたのである。

▲鴨綠江の兩岸

今先づ地勢上より鴨綠江の左右兩岸を比較對照して見やうならば奈何に自然が右岸即ち滿洲側に利にして左岸即ち韓國側に不利なるかを知ることが出来る、即ち韓國側は一帶の淺瀬にして舟楫の便無きに反し清國側は水深よして碇泊に便利である、清領は土地肥々人家稠密なるに反し韓領は地味瘦せ人烟甚だ稀少である、即ち自然の地勢が大に清に豊かにして韓に貧しく出来て居る之れ義州が次第に衰へ安東縣が益々榮ゆる所以であらう、何處迄も支那は富有的に朝鮮は貧乏的に出来て居ると見ゆる。此の河一つが貧富の境をなして居るのだ。

▲安東縣の戸口

安東縣の支那人は約三十萬など號すけれ共之は

例の支那人口調で頗る誇大なれば信を措き難いが船などに宿泊せるものを合せて實際十萬人以上十五萬人以下なりとは見受けらるゝやうだ。戸数は約千五百戸だが戸数の割に人口の多いのは事實である戦後日本人の居住せるもの軍人軍屬以外に約四千人外に韓人の定住者が約一千人位あるだらう。

▲舊市街と新市街

舊市街とは舊來の支那人の市街地で尖頭街、永安街、興隆街、中富街など支那人的に呼稱を用ひて居る、我が居留地の新市街は江畔に沿ひて設けられ河岸通、一番通、二番通、三番通、四番通、市場通、御神通に區劃し又大和町、青龍街、新豐町縣前街、山手通等の名稱ありて旅順大連の如く六かしき名稱を用ひざれば頗る通俗的にして呼び易く又肥臚し易く出来て居る、舊市街へは成る可く邦人の居住を許さずして悉く新市街へ移す方針なれば

次第に繁榮を増すであらう。

▲惣代役場と地料

安東縣には我が惣代役場が出来て居る、居留民一般の營業を取締り公共事業を擔任して居るが其の經費は營業課税として商店の等級を一等より五等に分ち以て課金を徴集して居る其れから我が新市街地借用者は一坪に付き市政準備金三十錢を徴收し其後は一ヶ年六錢として十ヶ年据わ置き十ヶ年後は時の相場に據り入札にて地料を評定し高低を定むる規定となつて居る、但し優先權者に對しては其の時に至りて七割の地料を拂はしむる方針だ、又藝妓營業者は最初より特別の税金を課せらるゝ様になつて居る。

▲京鐵線と滿洲線

京鐵鐵道が完成し而して滿洲線が敷設さるゝ曉は安東縣は其の中心點となりて鴨綠江の富を大に膨脹せしむるに相違ない、此點より見て安東縣は將來確かに有望な土地である、但

一時の盛衰は何處でも免かれぬ處で三十七年の冬には湧鏡郷として非常に景氣のよかつた此地も三十八年に至り一時不景氣を嘆ち中には店舖を閉ぢて他に移る日本人も澤山あつたが京鐵線と滿洲線との接続する曉は何うしても此地は發達すべき運命を持つて居る、近き未來に於て必ずや開港さるべく鐵道經營も亦進むに相違ない、確かに有望の地だ。

▲安東縣の貿易

安東縣の貿易は從來多く芝罘との間に行はれて居た、之れ安東縣の物産が主として材木、牛骨、砂金等で竹支那向きであつたからである、乍併開戦以來材木は我軍の手に歸し、且つ牛骨、砂金を始め大豆、豆粕、麻布等の物産も漸次日本人の手に買取る様になつたから芝罘との取引は殆んど絶へて了つた、尤も旅順封鎖の爲め芝罘航路が杜絶し一方日本よりは盛んに交通を開いたの

が其の主なる動機であつた、故に今後日本商人が少しく奮發したならば鴨綠江は我が商勢力の範圍に歸して北清との取引よりも寧ろ神戶大阪との取引が發達するに相違ない、雜貨其他の輸入品の如き勿論日本より直送すべきものだ。

▲安東縣の赤十字社員 安東縣に於ける我が赤十字社員は現今に於て六百九名今日迄に日本の本部へ送金したる金額約二萬圓に達して居る、安東縣にて加盟したる日清韓人の社員數區別は支那人正社員四百二名特別社員十二名小計四百十四名、朝鮮人正社員二十一名(特別社員なし)日本人正社員百四十名特別社員三十四名小計百七十四名の多數に達して居る、其他社員の徽章無かりし爲め已を得ず年釐金となりしものも五十餘名あるそうだ。

▲我軍票と清韓人 露國の紙幣は戦後全く跡を絶ち我が軍票は廣

く清韓人の間に行はるゝ様になつた、支那人は軍票を呼んで老頭票と云つて居る、蓋し票の表面に老人の肖像を印してある故だ、最初軍票の此地に来るや支那人間の信用薄く八割以下の相場を現はしたこともあるが漸次信用を増進して九割となつた、此の間韓人の附替屋は銀貨を積みて軍票の交換を行ひ大に儲けたそうである、白衣の東愛先生中々精巧なことをやつたものだ。

▲戦前の鳳凰城

▲露人の來仕 安東縣から鳳凰城は僅かに十四里であるが日露開戦前には無論此處へも露兵が駐屯し其れを相手に露國商人が開店をして居た、其の妻とも妾ともつかぬ地位に長崎生れの某と云ふ婦人が同棲して居たが此の婦人は以前其の朋輩の産み落したる日露人の合ひの子を或る事情から引受けて世話をして居た、名前は「トコナカ」と稱へ夫婦して非常に可愛がつて居たそうだ、元來此の店はビール、酒等を賣る所謂酒保のやうなものであつたが開戦以前日本人で鳳凰城附近へ出沒するものは大概此の婦人を便り婦人も亦女の身であり乍ら私かに國事に盡瘁したそうだ。

▲戦争と共に破壊 然るに日露開戦となり我軍は鴨綠江を超つて

前進する時に店主の露人は店を閉ぢ軍隊と共に退却せんことを勧めたけれども女は日本軍が追撃して來るのだから却て止まらんことを希望し遂に夫婦別れをして女は店と子供とを引受け踏み止まり主人は北走して了つたそうだ、處へ日本軍が追撃し來り思はぬ處に日本婦人一人碧眼の兒童を引連れて居るので流石の勇士も之は……と驚いたそうだ、其處で有らん限りの酒ビールを日本兵に饗應し店は自然に任せて破壊して了つたそうだが後此の女は子供を連れて安東縣へ下つて居た、戦争前の鳳凰城は露軍のお陰で随分儲かりましたよ」とは此婦人の述懐である、平時に於て男子も遠巡する西比利亞邊へ遠征するのは何れ斯かる勇婦であらう、罪の無い合ひの子は日本語を覺て頻りに愛嬌を振り蒔いて居た斯かる子女の行末は何うなるだらう。

▲軍政の大連灣

▲流石露國が専心經營した程あつて大連灣の設備は實に大したものである、東洋一の煙突やら大棧橋の構造など勿論邦人の眼に珍らしからざるには非ざれど其の最も驚嘆に値ひするは一體の設備が大國流で規模の大袈裟なる點に存するのだ。山を掘り海を埋め東の端から西の端へと思ひ切つて大設備を加へた跡などは中々以て島國的小國民の企及す可らざる處だ。大連灣に就て見るべきものは單に一種此の雄大なる露國風の大規模あるのみだ。

▲日本が大連灣を取り旅順港を占領して以來勿論幾多軍事上の必要もあつたであらうが永く軍政を布いて大連灣に普通人民の上陸を禁制したる爲め商權は早くも支那人の手に移り日本商人は不相變ヨク

商人間的に苛められて居る。戦時御用商人等は種々なる方面より入り込んで随分跋扈して居るけれ共彼等は元來眞正の實業家に非ずして只一時の奇利を狙ふのみだ、今若し商業眼を以て戦後の大連灣を觀察すれば日本商人の地位は頗る怪しいものである。もとゞゞ大連灣なる土地が既に商業地として格別見込のない處で露國のやうに絶えず馬鹿な金を蒔いて居ればこそ頗る繁昌も呈したるなれど日本が收用後露國の眞似をしない限りは經濟上發達すべき理由がない。滿洲の物産は金洲半島の如き不毛の地には殆んど之れ無く皆遼河附近の滿洲内地から産し其れを運搬するに無限の水運がある以上は總ての物資が營口に收收されるのは當然の理である。汽車の利便と云つても貨物に對しては到底水運に叶はない。唯單に東清鐵道の海陸接続地として人の出入に便利なる丈け幾分か望みを有して居るのであ

る。將來大貿易港たるの資格に於て聊か疑はしいものだ、補貨の輸入揚陸位が關の山ではあるまいか。其れも日本人よりは必ず支那人の方が熾んにやるに違ひない。元來支那人の方が商賣が上手の上に日本の爲政當局者は動もすれば日本人の商賣を阻害して迄も土人を懐柔せんとする模様があつたから商業の發達すべき道理がない。日露戦争で骨を折つたのは日本人、お陰を蒙つたのは支那人と云ふ時代が来るやうでは實に馬鹿々々しい話ではないか。

▲大連灣は戦後煙賣のマルニである、煙賣社會では今でも大連灣と云はずしてマルニとのみ呼ぶそうだが其の方が彼等の商賣柄かも知れぬ。日本商人が意氣地の無い代りに彼等の氣焰と來たらそれは又熾んなるもので假令地獄の底に落ちてても目的を達せざれば已まぬのである。之を以て見れば日本婦人は何處迄も墮落すべき要素を

具へて居るのかも知れぬ。落つる所まで落ちねば承知が出來ぬのが本性かも知れぬ。船又船、入船毎に進入つて來るのは在られもなき姫御前の一隊で街と云ふ街、家と云ふ家には油虫の如く潜み込んで居る。女ならでは夜の明けぬ國が段々西の方へ擴張さるゝ譯だ。之もマア何かの前兆だらう………兎に角勇ましいことだ。脱すべしだ。

▲大連灣は既に民政を布き又九月一日から自由渡航を許されたればまだしもであるが旅順口と來ては要塞の番兵嚴めしく容易に婦人など通入れる筈でない、然るに事實は之に反し何時の間にか婦女は往々るのみである、海陸共防備頗る嚴重なるに天より降りしか地より湧きしか流石の我が參謀官も當初合點參らざりし由なるが聴き正せば扱ても彼等の巧みなることよ。險よりするものは悉皆男裝して馬車に乗り途中露兵に用心しつゝ最早旅順に近づけば番兵の居る道を

避けて遠く迂回し、高粱の中にて日の暮るゝを待ち夕暮男女の顔も分かぬ間に密つと市中に入るそうだ、さりとて中々に油断のならぬ話である。次に海より入るものは旅順の沖に来る頃迄確か婦人の顔が見わたる密輸船の、港内に入りて何ものも居らぬのは不思議よと思へば其の夜旅順に揚陸されたる酒樽、醬酒樽又は或人の柳行李中より化物ならぬ正物の婦人がニコニコと現はるゝそうだ、斯くて旅順の色街が次第に榮わ行くは之も天下大平の兆であらう……。

▲遼河の鴨獵

▲上流の鴨島

三十四年秋牛莊に居た時のことである、二三友と

共に船を繰して遼河を遡り其上流牛家屯の上手にある鴨島と云ふ小島へ出獵した、全體遼河を畔に於ける雁鴨は非常に多くして朝鮮の各河畔にも劣らぬ位だ、其の雁鴨が朝夕多く此の鴨島へ下りて居る、其れを狙つて吾々が下手より遡り行けば上手には早や他の獵船が居て時々發砲する様子であつた、恰度双方の出會ひ頭と云ふ一角に鴨の奴が深山遊んで居る、吾々は一散に憎ぎ寄せて三人が狙定めて發砲するや

▲其二羽に命中

して一羽は海中に落ち一羽は羽振可笑しく飛び立つた、其れを向ひの獵船が又發砲して遂に落下したが該船は直ち

に廻掛けて鴨を奪らふとした、元來吾々の所得に歸すべきものだから此方も憎き行きて双方近附きたる時に先方が鴨を拾つて了つた、見れば三名の西洋人が乗組んで居たのである、當方も日本男兒負けでは居ず其の鴨返せと掛合つたが先方は自分の撃止めたことを主張して容易に聴かない當に

▲日●歐●人●の●喧●嘩● となりそんな模様だから僕が不圖心付いて双方を説き諭し「ハイッ」を以て鴨の肉を割き第一に取出したる彈丸の双方の銃に比べて見て其の正しき發砲者の方へ此の鴨を與へんことに提議した、すると西洋人も非常に悦び且つ興がりて立會の上毛を抜き肉を割いて取出したる第一の彈丸は見事日本人の銃のものであつた其處で此の鴨を受取るに異議あるまいと念押せば流石は淡泊なものである「サアお持ちなさい」と満足して鴨を渡し「又遇ひませう」

など奇麗に挨拶して引き別れた、其の日吾々の獲は鴨三羽に鴨二十羽。

▲蝸の瓶詰

▲北清の蝸 蛇蝸の如しと云つて嫌はるゝ蝸は日本には居無いが支那殊に北清には深山居る、天津、北京、塘沽の邊が最も多い様だ蝸の形状は蝦によく似て歩行する計り飛ぶことは出来ず尾端に鋭利の刃を持ちて要處を衝かるれば人間でも唯一撃に死んで了ふ、手足などを刺されて數日間療養に苦むものは深山ある、此の虫は夏の夕方壁、屋根などを匍ひ廻はり人之に觸るれば直ちに尾を振ふのである、性質は恐縮で極捕易いものだ、但尾を避くる爲め箸又は木片を要する。

▲四沾の蝸 三十三年夏僕が四沾に居た時の事である、毎夜夕涼みの慰みに近隣の子供を桀め提灯と瓶と箸とを携へて蝸を取りに

行く、僕よりも慣れた子供の方が上手だから忽ち三匹、五匹と捕えて瓶の中は一杯になる、之を持歸りて燈火に透し見れば大小無数の蝸が瓶の中で突貫して居る、中には子を^持つた^親が^其子^を脊^の上^に載^せて^歩いて^居る^のも^ある[、]實に奇々妙々だ、試みに蜘蛛の大きな奴を其中に投入すれば直ぐ刺されて死んで了ふ、依つて土など混入して暗室へ置き其の口を密閉さえしなければ蝸は十數日間活きて居る、併し遂には食物が無いから斃れて了ふ。恐る可きなれども卵の無い動物だ。

▲豚と白菜

▲遼東の豚 と云つて愚鈍な奴の形容に迄使はるゝ様になつた満洲の豚は實に此土地の人民が大切の財産である、日本で云へば輸出額第一の養蠶と云つた様なもので満洲の民家に豚を飼つて居らぬ家は殆んど一軒も無い、中には一軒の内に數十匹乃至数百匹を飼育して私かに其の富を誇る家もある、人民一般の肉食に随つて牧畜の盛んなることは日本人も到底支那人に叶はない、此の豚を賣るには重に市へ鬻ぎ又中には一家親族寄合ひて一頭を屠り其の肉と脂肪とを分配するものもある、支那では豚の位が非常に高く葬式又は祭典の時など諸供物の第一位を占めて居る、人間も亦よく豚に似て居る。

▲滿洲の白菜

滿洲で目立つて肥えたるものは實に豚と白菜とで

ある、白菜は株太く葉茂り色濃くて到底我が日本の粗米なる野菜の比ではない、之を煮るも之を漬物となすも味の美なること又格別だ勿論之は單に滿洲のみならず支那全土皆同様だ、此の種子を日本に試みた人があつたが奈何せん二年目には日本菜と成つて了つたそうだが、地質の相違だから仕方がないと見わる。

▲支那人の殺

▲商業上の秘密語 支那人の殺と云へば支那人が寄つてたかつて日本人を殺すやうに聞ゆるが同じ様な意味ではあつても決して人體に關したることではない、之は彼等が商業上に用ふる秘密語で矢張り「シャール」と云ふのである、此の語を一度び商品の上に用ひられたならば恐ろしい話で實際間接に締め殺さるゝ様なものだ、然らば實際奈何なる場合に用ひらるゝかと云へば之は輸入品に對する

▲一種の同盟攻撃 である、例へば今僕が綿絲一千捆を天津に輸入したりとせんに天津の支那商人が充分の見込をつけて一つ此の「殺」を試みやうとすれば甲乙丙丁有らん限りの同業者が或る處に集合して同盟する、勿論其の條件は利益分配主義だ、而して僕は之を

替らずして甲に向つて取引を試みるも甲は話にならぬ相協を附けて取合はず依つて乙に向つて相談するも殆んど甲同様随つて丙丁と順次當つても皆駄目だ、其處で僕が金利、倉敷等商品を持越す餘力が無ければ斯かる相協は無き筈だと思ひ乍らも遂に放棄せねばならぬ之れ即ち「殺」の成效にして

▲彼等が萬歳 を唱へる時だ、斯の如く彼等は商業上實に同盟の力が強く其の強固なる商略には歐米人も時に舌を巻くことがある、恰かも我が日本軍の戦法を彼等は商戦の上に應用して居るのだ、即ち此の「殺」の如きは我軍の「包圍攻撃法」と同一筆法だ、商業の上に於ては彼等と日本人とは地位が正反對で日本商人は毎に兵戦に於ける支那兵の地位に立つて居る、然れ共近來我が文明流の教育が漸く商業の上に活用され且つ人物も次第に商業界へ入つて來たから漸く

地位を恢復した現に此の「殺」の戦法も左様日本人が受けぬ様になつた、時に彼等の裏を掻くこともある位だから減多に清商も企てない。冀くは此の商略を以て日本商人が反對に彼等を包圍するやうありたいものだ。

▲對清貿易に就て

▲支那貿易の前途益々多量なることは今更喋々する迄も無し、我國は幸に對清貿易に於て年々顯著の發達を來し、今や輸出入金高に於て列國中確かに第二位にあり、されど此の貿易は必しも邦人の手に據りて取扱はるゝものに非ず。支那各港に於て賣買され取引さるゝ諸物貨は我國の産出其の重きを爲せ共邦人自から店舖を張りて是等營業に従事せるものは比較的寡少にして多くは支那人又は歐米人の手に我が製品を販賣收利さるゝに過ぎざるなり、支那に對する我が輸出は頗る盛なれ共支那に於ける我が商人は頗る無勢力なり、不信用なり、彼の三十三年の北清事變に於て我軍最も信用を博し、一擱千金的事業の壯なるや我國の所謂戰時商人なるもの吾もくと渡航

して天津北京に於ける日本商人は一時三千の上に出でたるが是等戦時商人が日清商業界に與へし影響は奈何。吾人は之を論及して遂に信用問題に歸着せざるを得ざる也。

▲活眼を開きて先づ大勢に鑑みよ、今や列國は全力を注いで對清問題に熱心し、鐵道嶺山到る處に文明の利器を應用し、兼ねて自國の製品を販賣せんと焦心しつゝあり、されば頑迷の支那人と雖も漸く舊思想を變じて事々物々新式のものを用ひ、大は政府の公事より小は個人の生活に到る迄其の需要を一新せしむること恰かも我が維新の當時に於けるが如けむ。又一方より見る時は彼等は生命財産の安全を保たんが爲め危険なる政府の下にあらんよりは寧ろ安全なる外國居留地に出で、外人と共同一致の營業に従事せんと欲ふや勿論なり。然らば支那人は世界何れの國民と結び何れの國と商業取引せん

ことを希望すべきか。我が開國の當時には親愛なる米國の誘導ありて萬事進歩の幸運に向ひたるが今日世界の一等國となり乍らも尙ほ舊來の恩義を忘れずして商業貿易の上に米國との取引は愈々益々發達の域に進まんとす。然らば則ち之を以て推すも我が對清交際は恰かも維新の米國式ならざる可らず。我が對清貿易は恰かも米の實利主義と同一規に出でざる可らず。假令日本政府は外交の必要上斷頭主義を執ることあるも日本國民就中日本商人は支那人に對して米國流の親切主義を執るべきなり。然らば彼等も亦悦んで我と交際し商取引の上に、社交の上に毎に協同の形を爲して大に經濟的關係を發達せしめ、我は足らざる資本を彼に求め、彼は及ばざる智識才藝を我に仰ぎ、事々物々相助け相導きて遂に四百餘州四億餘萬を善民なるが我顧客と化すること敢て望み無きに非ざるなり。然るに我が

商人は斯の如き遠大の度量見識無く、唯目前の暴利を食りて或は欺き或は偽はり、甚だしきは脅迫盜賊に類することを演じあらゆる不徳を公行して之を支那人及び各個人の前に暴露するが故に單に商事上の不信用不安心を買ひしのみならず、實に日本國民の聲價品位を尖墜せしめたるは慨嘆に堪へざる處なり。彼の北清事變以來三千の所謂日本商人が爲す處は多く之にして余が信用問題を問はんと欲する所以又實に之に外ならざるなり。斯の如くにして推移すれば日本商人の前途果して奈何。英、米、獨、佛、露の各個人が孜々として勵み汲々として修むるに比し漸色無からんや。

凡そ世界に支那人程不潔なる人間は無く又支那人程勤勉なるものなし、實に彼等は天性勞働的人民にして此の特點に向つては世界何れの國民もよく企て及ぶなし。故に我が下等勞働者が奈何に勢力を以

て支那に働かんと欲するも悉く失敗に歸し下るべきなり。現に北清事變の際我が人夫を用ひたる日英組、日獨組等は皆破綻失敗したるに非ずや、之れ決して我勞働者の情慢不遜と首はんよりも寧ろ支那苦力の遙かに卓越したるが故なりと斷すべし。然るに我國より支那に渡航する商人にして往々彼の出稼人根性を畜わ、働けば儲かるだらう位の卑劣心を有するもの少からず。實に思はざるの甚太しきものにして彼等は寧ろ布哇、米國に向ふべき也、支那に事業を経営せんと欲するものは少くも一個の商人ならざる可らず、紳士たらざる可らず。有力者たらざる可らず。智術、品性、信用の上に支那人と結托し彼等に安心と信頼とを與ふる丈けの人物ならざる可らず。此の資格無きもの、若くは此の資格を養はんとするものに非ざるよりは斷じて支那に手出しす可らず、渡航す可らず。現今の在支那邦人

と雖も大半引上げを命ずべき底のものなり。

▲嗚呼我が貿易家其の人を得ざるは實に國家社會の一大恨事ならずや。物貨は奈何に多く共貨幣は奈何に湧けり共之を取扱ふ人にして其の信用手腕無くんば何を以て事業の發達を期待す可けんや、今日の如く無賴無恥の下等商人をして海外到る處に跋扈せしめ悉く我が信用と品位とを毀損せしむるに至つては國家百年の大計を誤るものと當ふべき也。然らば則ち奈何にして今後の事を謀るべきか、徒らに海外渡航取締を嚴にして消極的に國民を制致せんよりも寧ろ大に國民の海外思想を鼓吹して、日本國內地にありても中流以上に位する人物をして出で、盛んに貿易の局に當らしむるは豈夫れ最良の積極主義に非ずや。斯の如くんば支那人は喜んで我實業家を迎へ安心して商業取引を爲すは勿論中には進んで資本の合同を彼より申込むに

至るは確かに保証する處也。由來支那人は物に取すること濃厚にして一度借すれば殆んど永久變ることなし。故に今日彼等の安心を買ふ時は其の利益は永久に涉りて驚くべく之に反して一度信用を害すれば其の弊害揚げて言ふ可からず。若し我が有力の實業家にして眞正に經營苦心せば從來の下等商人は忽ち顔色を失ひて自然に跋扈の跡を絶ち信用恢復するや疑ひを容る可らず。何となれば優勝劣敗は社會の原則なれば也。故に今日の要は我が内地の有力なる實業家或は其の子孫をして奮つて對消費易に従事せしむるに至り、之を奨励する爲めには政府はあらゆる便宜と保護を與へ又勳章等を授與して其の勇氣を鼓舞すべし。實業家諸氏も亦國家の爲め子孫百年の爲め奮つて現下の好時機に乗すべき也。對消費易に就て吾人の思ふ處斯の如し。

最新の韓半嶋終

明治三十九年一月廿五日印刷
全三十九年二月三日發行

著者

鹽崎 哲月

最新の韓半嶋

發行所兼印刷者

青木恒三郎

著作權所有

印刷所

嵩山堂印刷部
電話西七八二番

發行所

青木嵩山堂
電話東三五〇番

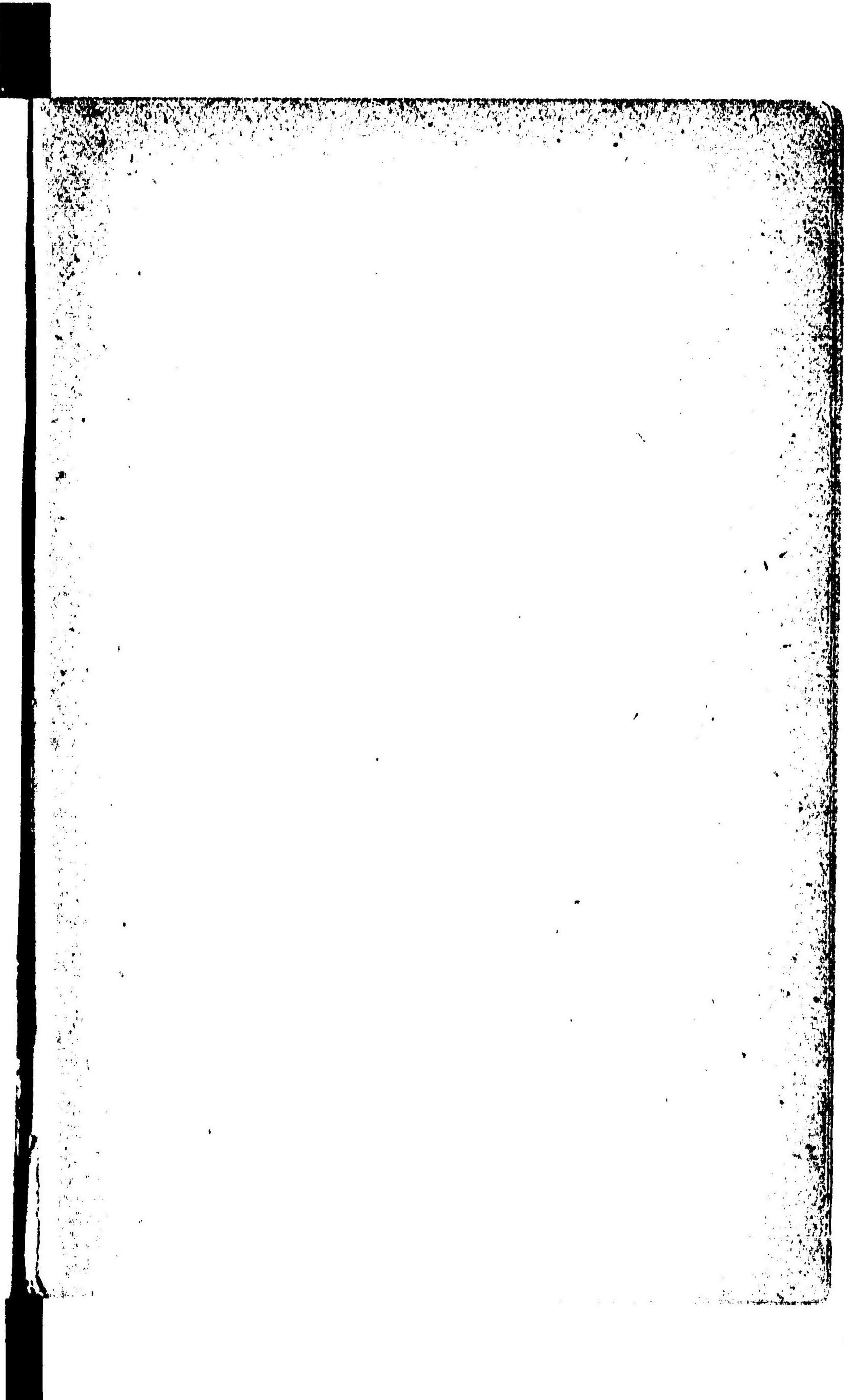
發行所

青木嵩山堂
電話本局七八九番

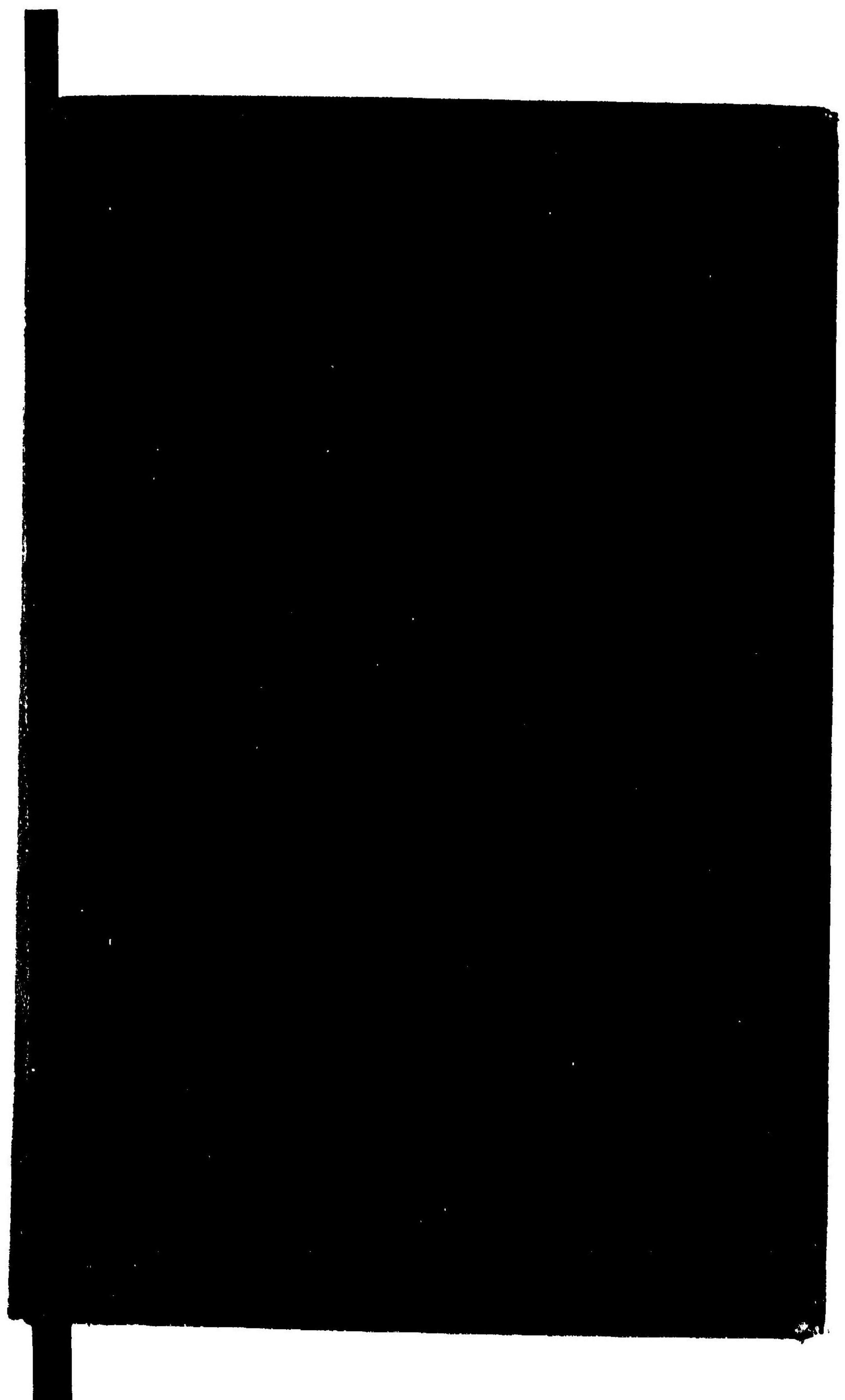
賣捌所

伊勢四日市市
嵩山堂支店

定價金八十錢



30
218



30
248

026412-000-7

30-248

最新の韓半島 附、濟洲雜記

塩崎 奮月 / 著

M39

ADD-0065

